

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡Ⅶ

昭和50年度

発掘調査

整備事業概報

福井県教育委員会

朝倉氏遺跡調査研究所

目 次

発 掘

第15次調査..... 1

第16次調査..... 9

第17次調査.....10

整 備.....24

石造遺物の調査.....26

研 究 所 要 項.....28

P L . 1 第15次発掘遺構、同整備状況

P L . 2 第17次調査・遺物

P L . 3 第15次調査・遺構

P L . 4 第15次調査・遺構

P L . 5 第15次調査・遺構

P L . 6 第15次調査・遺構

P L . 7 第15次調査・遺物

P L . 8 第15次調査・遺物

P L . 9 第15次調査・遺物

P L . 10 第15次調査・遺物

P L . 11 第15次調査・遺物

P L . 12 第16次調査・遺構

P L . 13 第17次調査・遺構

P L . 14 第17次調査・遺構

P L . 15 第17次調査・遺構

P L . 16 第17次調査・遺構

P L . 17 第17次調査・遺構

P L . 18 第17次調査・遺物

P L . 19 第17次調査・遺物

P L . 20 第17次調査・遺物

P L . 21 第17次調査・遺物

P L . 22 第17次調査・遺物

P L . 23 環境整備

P L . 24 環境整備

P L . 25 環境整備

P L . 26 石造遺物

第1 図 発掘調査・環境整備地位置図

第2 図 第15次調査・遺構全測図

第3 図 第15次調査・遺構(1)

第4 図 第15次調査・遺構(2)

第5 図 第15次調査・遺構(3)

第6 図 第15次調査・遺構(4)

第7 図 第15次調査・遺物(1)

第8 図 第15次調査・遺物(2)

第9 図 第15次調査・遺物(3)

第10 図 第15次調査・遺物(4)

第11 図 第17次調査・遺構全測図

第12 図 第17次調査・遺構(1)

第13 図 第17次調査・遺構(2)

第14 図 第17次調査・遺構(3)

第15 図 第17次調査・遺構(4)

第16 図 第16次調査・遺構全測図

第17 図 環境整備

第18 図 環境整備

第19 図 環境整備

は じ め に

昭和47年の研究所発足以来、皆様の終始変らぬ御協力をいただきまして、事業も着々と進捗し、これまでに朝倉氏の館跡、武家屋敷跡、寺院跡などを発掘調査すると共に、館跡周辺の保存整備もほぼ完了することができました。当初からの発掘調査面積は20,500㎡、環境整備面積は35,600㎡で、計画より少くはありますが、第2次5個年計画事業で予定しております遺跡も、瓢町、下城戸跡などを残すのみとなりました。

本年度の発掘調査は、武家屋敷跡の町並をなお一層明確にするため第15次調査を、一乗小校体育館建設に伴い第16次調査を、また寺院跡を明らかにするため第17次調査を行いました。現在遺構、遺物の整理検討中で、ここに報告します成果は、完全なものではありませんが、いささかでも皆様のお役に立ちますれば幸甚に存じます。

環境整備は、中の御殿跡の北半分、一乗谷川沿いの武家屋敷跡について実施しました。これで当主の館、一族の館、家臣の屋敷、町並などの整備を達成すると共に、その周辺には、十分な芝生の休養緑地を造成することができました。一応現在の見学利用者数には、十分混乱なく対処できると思われませんが、今後は寺院跡、城戸跡の遺跡、植栽、園路などの整備に力をそそぎ、史跡公園として一層充実したものにしていきたいと思ひます。

なお、今年度事業の実施にあたりまして、文化庁・特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査研究協議会・奈良国立文化財研究所・福井市教育委員会の関係各位の御指導と御協力をいただきました。また、城戸ノ内をはじめとする地元の皆様の、調査、整備事業に対する真摯なる御協力に心からの感謝の意を表しまして、発刊のごあいさつといたします。

昭和51年3月

朝倉氏遺跡調査研究所長 河原純之

発 掘

第 15 次 調 査 (武家屋敷跡の調査)

第15次調査は、第10・11次調査区の東、一乗谷川までの範囲約 2,400㎡について実施した。調査の期間は、第16次調査の関係もあって昭和50年4月1日から7月1日までと、7月29日から9月26日までの2回に分けて行なった。

この地区一帯は、本館跡・湯殿跡・中の御殿跡・新御殿跡など朝倉氏一族の居住した居館群とは、一乗谷川をはさんですぐ西側に位置しており、現在でも屋敷割を示す土塁などがよく残存している。字名では、川合殿・平井・斎藤という朝倉の家臣名がみられ、ショーゲドン・新馬場・オコヤシタなどと通称されている所もある。また「一乗谷古絵図」によれば、この地区に河合安芸守・朝倉三吾・鱈淵将監・平井・斎藤兵部などの屋敷名が書かれており、武家屋敷群のあり方・性格を追求する上で、重要な意味をもつ地区として注目されている。

第10・11次調査で、この地区の「新馬場」を調査した結果、山を背にして三方が土塁に囲まれた間口42m、奥行65mの屋敷跡と、その屋敷の前面に幅4mの幹道がほぼ南北に走っているのが検出された。その際、幹道の東側にも石積溝と小規模な土塁の存在が確かめられ、また試掘溝によって、幹道と一乗谷川との間の地区にも屋敷が存在することが判明した。

以上の知見から、今次調査は幹道から一乗谷川までの屋敷跡を明らかにすることによって、山裾から川までの武家屋敷群の町並を復原する目的をもって実施したのである。

遺 構 (P L. 1、P L. 3～6、第2図～第6図)

検出した主な遺構は、土塁4、通路2、門2、礎石建物5、掘立柱建物1、庭1、井戸9、石積施設13、塀2、他に土壇、溝、暗渠などがある。遺構の残存状態は、北半分の調査では床土の下に茶褐色砂質土層が厚さ30cmも堆積していたため、きわめて良好であった。他の部分でも、東の一乗谷川岸付近を除けば比較的良好に残っていた。また、南西よりの一段高くなった地区(通称オコヤシタ)では、生活遺構面が大きく3時期にわたっていることが確認できた。主要な遺構を時期別に列挙すると以下のとおりである。

第Ⅰ期(古)に属するもの 土塁S A 266・384、通路S S 386、門S I 279・415、礎石建物S B 405・406・411、掘立柱建物S B 409、庭S G 420、井戸S E 428・434・435、石積施設S F 436・437・441・443・444・445・446・447、塀S A 385、土壇S K 450・451・452、溝S D 268・273・388・397・398・399・400・401・403・459

第Ⅱ期に属するもの 土塁S A 266・267・383・384、通路S S 386・390、門S I 279・415、

礎石建物 S B 405・406・407・408、庭 S G 420、井戸 S E 428・429・430・431・432・433、石積施設 S F 436・437・438・439・440・442・448、塀 S A 385・392・414、土壇 S K 449、溝 S D 268・271・387・389・391・393・394・395・399・400・401・402・404、暗渠 S Z 467、石列 S X 418

第Ⅲ期(新)に属するもの 井戸 S E 358、土壇 S K 453

S A 266・267 第10次調査で検出された土塁で、幹道 S S 260の東をほぼ南北方向に走っている。今次調査の分もあわせて63mが明らかになった。幅は約 1.3mで比較的細く、また石垣に使用されている石も小さく、対面の土塁 S A 261の石垣が巨石を用いているのと対照的である。この土塁と幹道との間には、石積溝 S D 268が北方へ流れている。この溝は2時期にわたって使用されていたことが確かめられ、土塁 S A 266も当然2時期にわたり使用されたことがわかる。その際、土塁内側に部分的に幅 1.2mの土塁 S A 267を拡幅している。土塁の中ほどには、掘立柱の門 S I 279が検出されている。

S A 383 調査区の南西部を約50cm盛土して第Ⅱ期の遺構を築いた時、同時に作られた土塁で、そのため北側と南側との土塁基底で、約50cmの段差を生じている。この土塁は、幅約 1.3mで17.2mの長さまで検出したが、東方と、西方の土塁 S A 266へのとりつきは不明であった。土塁の途中には石段があり、通路 S S 390から井戸 S E 431へ通じるようになっている。

S A 384 調査区の北東隅で、南北に走る土塁 S A 384を長さ15m分検出した。土塁の南は攪乱されており不明であるが、幅 1.4mで土塁石垣の石も大きく、途中で門 S I 415が開かれている。土塁と一乗谷川との間に道路が予想されたが、攪乱が著しくよくわからなかった。この土塁が、土塁 S A 266や礎石建物 S B 405などと平行関係にないのは、川岸に制約を受けた結果と思われる。

S S 386 門 S I 279の正面で、幅 2.3m、長さ12.7mにわたって、固くたたきしめられた砂利敷の通路が検出された。通路の両側には縁石が置かれ、一段高くなっている。南の縁石を利用して溝 S D 387が通路排水として築かれ、北の縁石列は途中から北に折れている。通路そのものは、溝 S D 389と平行に走る塀 S A 392で遮蔽されている。通路の中央にも、通路を二分するように石列が1本走っている。この石列を境にして、北の通路は南の通路よりも約5cm高くなっており、2時期にわたって使用されていたことが推測できる。

S S 390 第Ⅱ期につくられた幅0.4m、長さ11.3mの石敷の通路である。土塁 S A 383と平行に走っており、東端で北方向に折れ、土塁 S A 383の中途に開かれた幅 1.2mの石段に続く。石段を降りれば、井戸 S E 431に通じる。

S I 279 土塁 S A 266にとりついた掘立柱の門で、柱間は 2.4mである。柱根は発見できなかったが、一辺20cm、深さ80cmの角穴が検出された。一部分に細かい礫が固くしまった状態で

敷かれていた。幹道 S S 260 を横断して溝 S D 271・273 の 2 条が門に直交しているが、第 I 期の溝 S D 273 が門の前に位置していたため、幹道をかき上げた第 II 期の時に溝も S D 271 に付けかえて門の通行に支障ないようにしている。このことから、この門 S I 279 は、第 I・II 期を通じて使用されたことが判明した。また「新馬場」の門 S I 278 と少しずらした位置に門 S I 279 を築いているのも特長的である。

S I 415 土塁 S A 384 にとりついた門である。門の幅は約 3 m あるが、礎石や掘立柱穴も検出されず、その門の規模や構造は不明であった。

S B 405 東西 11.3 m、南北 7.5 m の規模の礎石建物である。柱間数は、東西 6 間×南北 4 間で、ほとんどの礎石の上面には柱の裾えつけ位置を示す「+」印の線書が刻まれている。1 間が 1.883 m（6 尺 2 寸 1 分）の寸法で建てられており、間柱及び束の礎石も検出された。一応の部屋割を推定してみると、まず東西方向の棟通りで、北と南の 2 間ずつに 2 分される。北の半分では、西から 2 間分の空間と、井戸 S E 428 のある 4 間分とその東南隅に続く南半分の 1 間×1 間の計 2 つの空間が考えられ、南の半分では、西から 1 間半分、2 間半分の 2 つの空間と、残り 2 間分のうち北半分の 1 間×1 間を除いた計 3 つの空間からなり立っているものと思われる。

建物の東南隅には、次に述べる S B 406 の礎石建物が接続しており、西辺少し北よりには玄関と考えられる張り出しがみられ、西南隅には石積施設が作られている。西辺を除く建物の周囲には、雨落溝と考えられる S D 399・400・401 の石積溝がめぐっている。S X 418 の河原石積列は、建物 S B 405 の第 II 期の時か、あるいはそれ以降に積まれたものと思われるが、何のための施設であるかは不明である。

S B 406 建物 S B 405 の東南隅に接続した一辺 2.8 m（1 間半）の正方形の礎石建物である。その東辺と南辺には幅約 0.5 m の縁がとりついている。建物の東側には庭 S G 420 が配されている。4 畳半の正方形の建物であることや、坪庭に面していることなど本館跡の建物 S B 11 と非常によく似た性格を有しており、建物 S B 405 に付属した茶室と考えられる。

S B 407 発掘区の中央付近で東西 3.78 m（2 間）×南北 8.53 m（4 間半）の礎石建物が検出できた。東西隅には、東西 1.89 m（1 間）×南北 2.84 m（1 間半）の小建物が張り出してとりついている。南辺の西よりには、狭間石がわずかに残存している。

S B 408 一辺 3.8 m（2 間）の正方形の平面をもつ建物である。建物周囲の各辺には、礎石大の石を連ねているが、礎石と確認できる石がどれに相当するのかは不明である。この建物の内部には焼土・炭が多く認められ、第 II 期の建物である。

S B 411 第 I 期に確実に建てられた礎石建物で、東西 8.45 m×南北 5.55 m の規模をもつと推定される。上層に遺構が残存するため全面発掘はできなかった。柱間は、1 間 1.85 m が基準となっている。

S B 409 建物S B 408よりも古い、第I期に築かれた掘立柱の建物で、東西3.85m(2間)×南北4.8m(2間半)の規模をもっている。

S G 420 茶室S B 406の東側に設けられた坪庭で、東と南の二方は、土塁S A 384と障壁S A 385でかこわれている。天端の平たい庭石を数個、建物に平行に伏せて配置してある。庭石の周辺には砂利が敷かれてあったらしく、広範囲に砂利敷面が検出された。庭の西南側には、庭石でかこわれ一段高く盛土された、砂利が敷かれていない部分が検出された。おそらく低木などが植栽されてあった植込と推定される。このような部分は、館跡のS G22にもあり、茶室との関係や伏石の配置、砂利敷を用いた平庭であることなどにも両者類似したところが見られる。茶室と推定されるS B 406から観賞できるよう、一体に計画されたもので、紹鷗四畳半の図にみられる「面坪ノ内」に相当すると考えられる。

S E 358, 428～435 井戸は計9基検出した。全て石積みの井戸で、深さは2.0mから3.5m前後のものである。井戸上面の踏石も、比較的よく残っており、S E 428の井戸からは、井戸枠石も一部完形で出土した。形式的にみると(イ)胴張りがみられるもの(ロ)上面から少し垂直に下がり、途中から下部が少し広がるもの(ハ)上面から底までさほど広がりをみせず垂直のままのものなどがみられる。以下規模などを下表に示しておく。

S F 436～448 石積施設は、計13基検出した。縦1.5m、横1.0m、深さ0.5m程度の河原石を3・4段に積んだ規模のものである。通称新馬場の調査時に、東北隅で検出された石積施設よりもひとまわり小さく、普通よくみられる大きさのものである。時期は第I期、第I～II期、第II期のものと大別することができそうである。石積施設の配置をみると、建物S B 405にとりついたS F 437を例外とすると、S F 436・438・439・440・448など大半の石積施設が屋敷を限る土塁近くに位置する傾向がみられる。このことはS F 441・442・443・444・445・

| No. | 上面直径 | 深さ | 形式 | 底の木組 | 井戸枠石 | 時期 | 出土遺物 |
|-----|------|-------|----|------|------|------|------------------------------|
| 428 | 0.62 | 2.0 | ロ | なし | あり | I・II | 灯明皿・甕・播鉢・染付皿 |
| 429 | 0.68 | (1.4) | ロ | なし | ? | II | 灯明皿・甕・青磁片・銅銭 |
| 430 | 0.88 | 2.25 | イ | なし | あり | II | 甕・播鉢・白磁片・バンドコ・鍛先・鍛木部 |
| 431 | 0.90 | 2.3 | イ | なし | あり | II | 甕・ねり鉢・薬研・染付皿・バンドコ・銅銭 |
| 432 | 0.84 | (2.0) | ハ | 不明 | ? | II | 灯明皿・甕・播鉢・青磁碗・バンドコ |
| 433 | 0.74 | 3.4 | ハ | なし | あり | II | 甕・播鉢・鉄釉小壺・染付皿・茶臼・バンドコ・銅銭 |
| 434 | 0.9 | 2.07 | イ | なし | あり | I | 甕・ねり鉢・天目茶碗・鉄釉小壺・白磁片・硯・茶臼・手水鉢 |
| 435 | 0.52 | 2.03 | ロ | なし | ? | I | 木器・鉄釘・鉄器・壁土多し |
| 358 | 0.58 | 2.8 | ハ | なし | ? | III | 甕・播鉢・灰釉皿・壁土多し |

第15次調査発掘井戸一覧表

446・447なども現在ではこれより東側が一乗谷川によって破壊されていて屋敷がどこまであったかは不明であるが、この一連の石積施設の少し東側で屋敷が終っていたという推定の根拠になるかもしれない。

石積施設は、山科寺内町、近江観音寺城跡などからも検出されている。一乗谷の調査では、谷のどこを調査しても検出されるものである。石積施設の性格は、従来より溜耕説・貯蔵庫説など、いろいろ言われているが、現在の所よく分からないという他ない。ただこの石積施設の上に屋根をかけるための礎石や掘立柱跡などがみられないことから、底をだし覆ったり、板などの蓋をかぶせた簡素なものではなかったかと考えられる。また、炭や焼土が必ず内に充満しており、出土遺物に灯明皿・甕片・播鉢・銅銭・鉄釘などが必ずといってよいほど検出されるという特長をもっている。

S A 385・392・414 塀 S A 385は、建物 S B 405の南に溝 S D 393・399に挟まれて東西方向に走っている。塀の上部には、直径約15cmの円柱を立てており、井戸 S E 430の屋根などから建物 S B 405を遮蔽している。塀 S A 392は、門 S I 279をはいった真正面にある目隠し塀で南北 6.5m（5間）あり、角柱の柱根が残存していた。S A 414は、第Ⅰ期の建物 S B 411が廃されその上に厚さ 0.5mの整地を行なった時に作られた第Ⅱ期のもので、掘立柱建物の柱穴の可能性もある。

S K 449～453 土坑は多く検出された。S K 449は、第Ⅱ期の土坑で、そこからは硯・銅環などの多くの完形遺物が、一括して出土した。S K 451・452は第Ⅰ期の土坑で、とくに S K 452は3.6m×4.0mの大きさの方形土坑で、内に焼土が充満しており、越前焼の大甕の底が原位置で4個検出できた。復原できたものを合計すると14個体となる。これらが土坑内につまっていたことになる。S K 453は第Ⅲ期の土坑である。

S D 387～389、391、393～404、459 通路 S S 386の北を東西に走る素掘りの溝 S D 388、南を東西に走る石組溝 S D 387、建物 S B 405の周囲にみられる雨落溝 S D 399・400・401、土塁 S A 383と石敷通路 S S 390との間を流れる溝 S D 391など多くの溝が検出できた。また、溝 S D 391の西端で北へ折れる所には、土塁 S A 383をくぐる暗渠が考えられるし、溝 S D 395の東端では、土塁 S A 384をくぐる河原石の底石をもつ小さな暗渠 S Z 467が検出された。

以上の調査の結果、一乗谷川の岸より幅 8 mほどは遺構が破壊されていたが、本来は川際まで屋敷の土塁や道路などの遺構が存在していたことが推察できた。そして、幅 4 mの幹道の両側に、武家屋敷が整然と並ぶ中世後期の町並みがあきらかにされたことは、今後の中世城郭の研究を進めていく上で貴重な資料となりうると思われる。なお、この調査区が一軒の屋敷跡であるか、土塁 S A 383で北屋敷と南屋敷とに分けられるのかは今後の調査にまたなければならないことを付記しておく。

遺 物 (P L. 7～11、第7図～第10図)

出土遺物には、土器類、金属器類、石製品類などがある。特に大甕や硯の出土がめだち、越前焼の薬研などの出土も珍しいものであった。

土器類

土師質土器 土師質土器の大半は、皿と羽釜であり、他に若干の耳皿、小碗、香炉、蓋のつまみ等がみられる。土師質の皿が灯明皿、酒坏、盛皿などに使用されたであろうことは、すでに「概報Ⅵ」等で述べて来た所である。今回は、一つのころみとして、破片の中から完形品を全てとり出し(60個体)その重量を測ってみた(3120g)。その結果、1個体の平均値52gという数値を得たので、これで今次調査出土の土師質皿の総重量(71230g)を単純に割ってみた。以上のことから、今回の調査区域で使用された土師質皿の総数が、約1370枚であったことがおよそ推定できた。土師質の羽釜は、57点出土した。口径7cm、高さ7cm程度の小型のものがほとんどで、外面に煤の付着している例も多い。10は、第Ⅰ期の層から出土した完形品で、粘土を4段に輪積した後、羽をとりつけ、押えとナデとで調整を加えている。口縁直下に、へらで縦に2本線を刻んでいるもの4点、3本線を刻んでいるもの1点がみられた。

越前焼 越前焼の多くは甕で、とくに土塚S K 452からは、復原できたものだけでも14個体出土した。他に壺、播鉢、鉢、火桶、薬研などがある。甕は大、中の大きさのものが出土した。大甕は、口径90cm程度の円形のもの、長径90cm、短径70cm程度の楕円形のものに二分される。高さは、ほとんどのものが約90cmである。肩部にへら書きの記号と「本」印のスタンプが必ずつけられている。8は容量1.6石強、6は2石ある。中甕は、口径44.5cm、高さ72.5cmをはかり、肩部にはへら書きや「本」印はみられない。壺は、お歯黒壺と呼ばれる小壺の出土が多かった。2は、肩部が少しはった粗雑な作りの小壺で、3は胴部に最大径をもつお歯黒壺で、底部はどっしりと大きい。口端部に鶯口をもち、肩部にはへら書きの記号がみられる。4は、非常に作りのよい壺で、口縁部に越前焼の古式の形態をよくとどめている。14C後半の遺物であろう。肩部には、へら書きの記号がみられる。この記号は越前焼に通常にみられるものではなく、花押を書いたようである。5の壺は、直径20.1cm、高さ39.3cmある。1は、薬研でどっしりとした台が付いている。上面と台の側面とにへら書きの記号がみられる。薬研の例としては、越前焼の遺品の中では古いものである。薬種を砕く車輪状のものも伴出している。

瀬戸・美濃焼 灰釉のかかったものでは皿が一番多く、他に段皿、茶碗、片口鉢、香炉などがある。鉄釉のかかったものでは、天目茶碗、茶入れ、小壺がある。11～21までの資料は、S K 450の土塚から出土した一括遺物である。11～13までは灰釉皿で、11の小皿の見込みには「カタバミ」の印花が、13の皿の内面には「菊花」がそれぞれ施されている。外面底部には輪トチ痕が残っている。14～18は、鉄釉を施した徳利形の小壺である。胴下部に最大径があり、頸部

は指一本はいる程度にしめている。ロクロ成形が明瞭にわかる。**18**だけは、徳利形ではない違った壺で、底部には糸切り痕がみられる。**19**は、合子あるいは茶入れと考えられる小品である。**20・21**は、器形は違っているが、ともに茶入れである。**22**は、口径12cm、高さ 6.5cmの天目茶碗の完形品である。高台は、削り高台である。高台は、内を丸く削るもの、平坦に削るもの、兜巾部を残すものの3類に分けられる。

朝鮮製陶器 朝鮮製陶器は、量的には非常に少ない。2個体分出土しているが、復原できるまでにはいたっていない。P L. 9-h・iの2点は、泥釉瓶と考えられる。胎土は固くたたきしめられており、色調はこげ茶色を呈す。釉は、灰緑褐色で灰分が多いため釉がむらになっている。器形は、胴の最大径が底部近くにあり、頸部がぐっとしまつて、口縁部が外反している。底径は約18cmである。

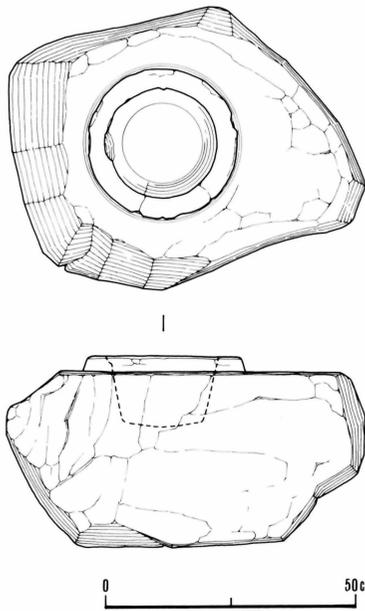
中国製磁器

青白磁 青白磁は1点分7片が出土した。P L. 9-jは、青白磁渦文梅瓶の底部である。宋代の景德鎮系の製品と考えられる。

青磁 青磁製品は、碗、皿、小壺、香炉、花生などがある。碗は、蓮弁文をもつI類中浮彫の蓮弁をもつもの6点(P L. 9-l)、線刻の剣先形の蓮弁をもつもの42点(同一m・n)、無文のII類中直口で口端直下に沈線をもつもの9点(同一o)、沈線をもたないもの11点がある。底部だけの破片も31点出土している。高台は厚く 1.5cm前後あり、見込みに印花がほとんどにみられ、高台裏は、兜巾部を残してその周囲の釉を丸くふきとっている。壺付部にも釉がかかっている。皿は、大半が稜花皿で17点ある。P L. 9-pのものは、口縁がゆるく外反し、稜をなしている。見込みは広く、腰部に稜がつけられている。口縁部の内面には、渦文あるいは波文がみられる。高台裏の釉は、ほとんどのものがふきとられているが、見込みの釉をふきとった例もある。P L. 9-sは作りのよい壺で、胴部には全面に豎のしのぎ文を配している。頸部は短い。口端部の釉は、蓋を合わせて焼いているため胎土を露呈している。花生は1個体分出土したが、復原はできなかった。型に押しつけて作られたもので、内面には指による押えの跡や布目の跡も荒く残されている。また、花生の頸部にとりつけられた不遊環も伴出している。P L. 9-tは香炉片である。

白磁 白磁製品の主なものは、皿で他に若干の小坏が出土している。皿は、口径12cm程度のもが多く、口縁部の外反するのが圧倒的である。**23**は、口径16.3cm、高さ 3.8cmの少し大きい皿で、底部裏に「福」の銘をもつ。皿では、他に菊花皿や碁笥底の器形をもつ皿も1・2点出土している。小坏は、底部だけでも8点出土している。口径は6cm程度のもので、口縁が外反するのとしのないのに分けられる。見込み中央の釉を残して、その周囲の釉を丸くきれいにふきとっているのが特長である。

染付 染付製品は、碗、皿、小坏、承台などがあり、中でもとくに皿の出土が顕著であった。



碗は8点出土した。口径12cm、高さ6cm程度のもので、見込みに人物を描いたものや、高台裏に「大明年造」銘をもつものなどがある。皿は破片で530点の出土をみた。約半数が**25**と同タイプの小皿である。口径8.9cm、高さ2cmで、口縁部は外反しており低い高台をもつ。外側には唐草文をめぐらし、見込みには意匠化された十字花文を配している。碁笥底をもつ皿は、9点出土している。口縁部がわずかに内湾しているのが多い中で**26**は、口縁部が外反している。口径13cm、高さ3.7cmの蓮池魚藻文皿である。見込みの波間に描かれた動物は、意匠化されていてよく分からないが、巻貝のようでもある。**27**は、見込みに大きく意匠化された「寿」が書かれている。P L. 10-g・hも同じく碁笥底の皿であるが、gは、バシヨウ文のくずれた文様を配して

いる。小坏は、9点出土した。P L. 10-i~lの4点は、口径6.5cm、高さ4cmの、口縁部が外反するものである。外面には、草花文がめぐっており、見込みには意匠化された山岳風景が描かれている。高台裏には「大明年造」「正徳年造」「□□長春」などの銘がみられる。**24**は、承台である。高さ8.5cmで、台の上に4脚を配し、その上に一辺8.3cmの受け部をもつ。受け部には、径5.2cmの円形の挿入口があげられている。何の器を置く台かはよくわからない。P L. 10-aは、赤絵皿の破片である。

金属器類

金属製品では、鉄釘、蝶番、小柄、鋸、鋏先、銅坏、分銅、銅製盤、銅銭などが出土した。**28**は、口径7.5cm、高さ3cmの銅坏で、把手を鋸留めしている。高台裏には「大」の線刻がみられる。**29**も銅坏で、ともに土壇S K 450から出土した。**30**は、分銅で、上部に紐穴がみられる。重量は21.85g(5.82匁)である。**31**は、鉄製の鋏先で、井戸S E 430から、その木部とともに出土した。銅銭は、122枚出土した。唐銭11、北宋銭65、南宋銭2、明銭12、判読不明32である。銅盤は、大甕の中から出土したもので、直径33cmでたち上りは1.8cmである。

石製品類

石製品には、硯、火炉、ねり鉢、手水鉢、茶臼、砥石、井戸杵などがある。硯は、全て長方形で、30点出土した。**32**は小形、**34**は大形に属す。底部は、整形したもの、しないもの、側脚をつけたものなどがある。火炉は、全て火山礫凝灰岩製で、「概報VI」で述べたものと同タイプのものばかりであるが、**35**は、新しいタイプである。手水鉢(上図)は、井戸S E 434から出土した。井戸杵は、火山礫凝灰岩製で、井戸S E 428から2枚完形で出土した(第19図右)。

第 16 次 調 査 (一乗小学校体育館建設に伴う緊急調査)

第16次調査は、福井市西新町1-4の福井市立一乗小学校体育館建設に伴う緊急調査で、調査面積は約350㎡である。発掘調査は福井市教育委員会の依頼をうけて昭和50年7月3日から7月28日までの期間実施した。当調査地は、上城戸を出たすぐ西の山際に位置しており、朝倉街道から大手道を越え上城戸に至る幹道の要衝の地を占めている。

今回の調査の結果検出した遺構は、土塁3・建物1・道路1・石積施設2・石積溝3・暗渠1などがある。

S A 468・469・470 北東から南西に延びる幅0.8mの土塁S A 468を長さ6m分、それにT字型に接続する幅0.8mの土塁S A 469を長さ5.5m分、発掘区中央付近で幅0.8mの土塁S A 470を長さ6m分検出した。S A 468とS A 470の土塁は本来一本の土塁であつたと考えられるが、現在では攪乱されていて不明である。直線ではなく弓状に湾曲している。また、S A 469はS A 468の土塁に直角に交わっていない。これらのことは、この地区の地割りが狭長な地形に制約をうけて成立していることを示唆しているといえよう。

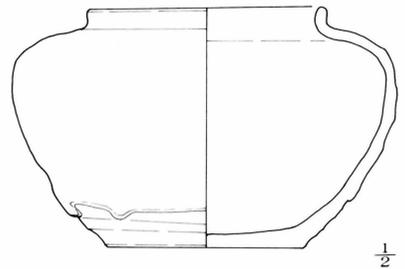
S S 476 土塁の南東側で、幅2mの固くたたきしめた道路面が検出された。両側には、人頭大の石列を配している。この道路は、土塁とは少し偏れて走っており、溝S D 471を埋めている。比較的新しい時期の遺構である。道路の南東側は、一乗谷川の河原となっている。

S B 486 発掘区北よりの中央付近で検出された礎石建物である。南北方位に対して約20度北で西に偏れている。東西5.15m、南北は未発掘の部分もあるので不明であるが、3.48m分までの建物が検出された。この建物は、S A 469の土塁・S D 472の溝・S X 479・480の石列・S F 475の石積施設などと平行し、S A 468・470の土塁・S S 476の道路・S D 471の溝などとは平行関係にない。S D 472の溝は、この建物の雨落溝と考えられる。

S F 474・475 S F 474の石積施設は、1.5×0.9mの規模で2段に石を積んでいる。灯明皿・鉄釘・銅銭などの出土をみた。S F 475は1.5×1.2mの規模で4段に石を積んでいる。

S D 471 S D 471の溝は2時期あり、下層から天目茶入れ(上図)が出土している。

遺物は、越前焼の甕・壺・播鉢・鉢・天目茶碗・茶入れ・灰釉・青磁・白磁・染付けの碗・皿・高麗壺・石製白・銅銭・鉄釘・小柄・土師質土器などが出土した。播鉢の胴部に花押を墨書(下図)したのもも検出された。



第 17 次 調 査 (サイゴージ跡の調査)

一乗谷周域には、当地が栄えた頃の状況を伝える名で通称される種々の屋敷群が点在する。朝倉氏遺跡調査研究所では、すでに第 5 代一乗谷城主朝倉義景の館跡と推定される一画の調査を終え、その調査の手を武家屋敷群へと広げ、その概要を明らかにし、同時に、当時の町割の一端も検出する等の成果を上げてきた。

今回の第 17 次調査は、そうした調査の成果を受け、さらに発展させるものとして「サイゴージ」と通称される、福井市城戸ノ内町字赤淵の地、面積約 2,050m²の発掘調査を実施した。その「サイゴージ」の通称により、寺跡ではないかと推定され、そうした寺は、谷の中で、どのような形体を取るのか、他の屋敷群・町割との関係はどのようになっているのか等の種々の期待が持たれた。

調査は、昭和 50 年 9 月 30 日より開始し、冬期をはさんで、翌年 3 月 31 日をもって、発掘作業を終えた。その結果、多量の石仏、及び塔婆等の出土を見、また、検出された建築遺構群等により、伝承通り、寺跡であることを確認し、町割の一端も明らかにする等の数々の成果を上げた。現在は、出土遺物の整理等、検討中であるが、以下、その調査概要を報告する。

遺 構

調査は、まず、一部地上に現われている、東西に走る 2 条の土塁を基準にして、発掘区を設定し、町割等の確認のため、東・南へ、トレンチ 4 本を入れた。

調査の結果、検出した主な遺構は、道（通）路 4、土塁 2、石垣 5、門 3、礎石建物 23、石積溝 17、石積施設 17 等である。遺構群は、その方位、レベル差等により、大きく三期に別けられ、それぞれに、若干の改造等が伴う。ここでは、とりあえず、下層より、第 I 期、第 II 期、第 III 期として記述する。また、北の東西方向土塁を基準とした発掘・実測方位は、真北に対し、北で、東へ 20° 33' 25" 振れているが、記述の都合上、以下特にことわらない限り、北土塁の方向を東西、すなわち山側を西として記述する。(この項については、図版 P L. 13～P L. 17、図面第 11 図より第 15 図を参照されたい。)

SA 487 寺域の南を画すると考えられる、東西方向の土塁である。門 S I 520 を開く。この S I 520 を境に、西の山裾に取り付く部分は、残存状況が良く、高さ（道路 S S 493 より）約 1.2m、幅 1.8m を計る。S S 493 の南面側は、径 1 m 前後の比較的大きな自然石を、北面屋敷内側は、径 0.6m 以下の小さな自然石を積んでいる。S I 520 より東側は、ほとんど残存高がなく、西側のように積まれていなかったようである。

SA 488 寺域の北を画すると考えられる、東西方向土塁である。西山裾に門 S I 522 を開く。北面には、径約 1.5m 前後の巨大な自然石を配し、残存最高高約 1.8m、長さ約 32m、幅約 1.8m である。東端付近では、改造の跡がみられ、幅が狭められている。この改造は、第 II 期か

ら第Ⅲ期へ移る時であろう。また、土塁西部内面に、石垣状の遺構SV 489,490を積み、2～3段とし、その壇より、五輪塔や石仏等の出土を見たことにより、その壇は、石仏が並べ置かれ、供養する等の用途に供されたと考えられる。

SV 491・492 西側山裾の、石垣である。SV 491には、巨大な自然石を配している。また、SV 491とSV 492の間は、屋敷建築遺構面より、約1m上り、幅約1.5mの壇状の高まりを呈し、北で、門SI 522に通じ、また、SI 522の南で東へ折れ、なだらかに、下り、屋敷面へ通じる。SV 491の上の壇、及び、屋敷西南部一角の高まりが、未調査のため、くわしい性格は不明である。

SX 544 東へ延ばしたトレンチの東端に検出された石積遺構である。積んだというよりは、むしろ、置いた程度のもので、すぐ東が、一乗谷川であることと合わせ考えると、川の護岸に関連する遺構であると考えられる。

SS 493 SA 487とほぼ平行に、東西にはしる道路遺構である。南へ延ばした3本のトレンチにより検出されている側溝SD 501を持つ。道路幅は、SI 520前では、側溝を含めて、約8mである。幅8mといっても、そのほぼ中央部に、幅約2.4mの砂利敷面SX 605を持つことから、その2.4m幅が、主として、道路として利用されたと考えられる。ただ、トレンチによる確認であるため、その行き先等、不明な点も多い。

SS 495 東トレンチの東部で検出された、南北方向の道路で、その側溝SD 518を含めて、幅約3.2m、砂利敷面は、西より約2.4m幅にわたってみられた。これはSX 605と同じ幅で

| 遺 構 番 号 | 期 別 | | | 遺 構 番 号 | 期 別 | | |
|---------------|---------|-------|-------|---------------|-------|---------|-------|
| | 第Ⅰ期 | 第Ⅱ期 | 第Ⅲ期 | | 第Ⅰ期 | 第Ⅱ期 | 第Ⅲ期 |
| SA 487 | ————— | ————— | ————— | SD 507 | | ————— | |
| SA 488 | ————— | ————— | ————— | SD 508 | ————— | | |
| SV 489・490 | ┆-----┆ | ————— | ————— | SI 520 | | ————— | ————— |
| SV 491・492 | ————— | ————— | ————— | SI 521 | ————— | | |
| SS 493・494 | ————— | ————— | ————— | SB 523 | | | ————— |
| SS 495・SX 544 | ————— | ————— | ————— | SB 524・SC 528 | | | ————— |
| SS 496 | | ————— | ————— | SB 525～527 | | | ————— |
| SS 497 | ————— | | | SB 531・534 | | ————— | |
| SD 499 | ————— | ————— | ————— | SB 532 | ————— | | |
| SD 500 | | ————— | ————— | SB 550 | ————— | | |
| SD 501 | ————— | ————— | ————— | SB 551 | ————— | | |
| SD 502 | ————— | | | SB 554 | ————— | -----┆ | |
| SD 503 | | | ————— | SB 555 | ————— | -----┆ | |
| SD 504 | | | ————— | SB 556 | | | ————— |
| SD 505 | | | ————— | SE 562～564 | | ┆-----┆ | ————— |
| SD 506 | | ————— | | | | | |

主要遺構時期別一覧表

ある。このS S 495は、一乗谷川に沿って走る道路であると考えられる。

S D 500 発掘区のほぼ中央を、南北に流れる石積溝である。ほぼこの溝の位置に、現在の農業用溝が通っていたため、上部は、一部破壊されている。とにかく、このS D 500によって、この屋敷内の機能は大きく二分されていたと考えられる。この溝は、幅約50cm前後あり、北へ向って流れていた様子である。幾度かの改造が考えられ、当初は、S A 488とほぼ直交して走っていたと考えられ、その痕跡を北部に残す。またその北部は溝側石も比較的大きく（径30cm前後）、かつ、しっかりと積まれている。中央部は、それから約5°振って第Ⅲ期建築遺構群の方位に合わせ、S C 528の雨落溝も兼ねる。この部分では、小さな石を雑に積み、中には火山礫凝灰岩切石の転用もみられる。そして、南部で再び、方向を曲げ、S A 487と直交する。ここでは、再び、多少積み方もしっかりしていて、南へ延びている。そして、トレンチ内で、さらに東へ振って、当初の溝の延長線と、S D 501との交点に取りつく。深さは約50cmあり、多量の土師質皿・土鈴及び、染付等の磁器類、天目茶碗等の陶器類、また、漆器、墨書木製品、銅銭、鉄釘等の金属製品、その他、種子等の植物遺物の出土を見た。S D 500は、第Ⅱ・Ⅲ期の溝であろう。第Ⅰ期の溝としては、トレンチ下層に溝S D 502が検出された。

S D 499 S A 487の南に沿って、東西に走り、東でS D 500と出合っている。

この溝は第Ⅰ～Ⅲ期にわたって存在する。すなわち、第Ⅲ期の溝側石面より下約20cmに、多少南よりの石列が存在する。これが第Ⅱ期に相当すると考えられ、道路面もここまで下ると考えられる。そして、第Ⅰ期は、さらに、約25cm下って、S D 502に出合う。溝幅は、30～40cm程度である。

S D 503 屋敷内西部の第Ⅲ期建築遺構群の南を、東西に流れ、S D 500へそそぐ。幅は約30cm、深さは一石分である約25cmである。所々、側石がぬけているが、やはり、当初は、きちんとした側石列を持っていたと考えられる。この溝からは、特に、多量の一部焼けた木製塔婆の出土を見、この屋敷の性格を裏付ける有力な根拠となった。

S D 504 S D 503の北方約16mの位置で、ほぼS D 503と平行に流れ、S D 500にそそぐ。比較的浅く、約15cmの深さで、幅は、約20cmである。西の方で、南へ折れる。S D 505との取り付きは、明らかに出来なかったが、一連のものと考えて良いであろう。また、溝内に、柵状の柱穴群S A 599を持つ。この溝からは、一括97枚の銅銭の出土を見ている。この溝も、第Ⅲ期に属するものであろう。

S D 506 第Ⅲ期建築遺構面の直下に検出された溝で、残存状況が悪く、第Ⅲ期には廃棄された、第Ⅱ期に属する溝であろう。側石に「天文十三年」「法華経」等と刻まれた石塔が転用されている。

S I 520・521 S A 487のほぼ中央に位置して、南面する門遺構である。S D 499等、他の遺構群に対応して、三時期の遺構が検出されている。すなわち、第Ⅲ・Ⅱ期にあたるのが、S I

520である。この間はS D 499と同じく、約20cmのレベル差を持つ。第Ⅲ期の様子は、あまり明らかではないが、門前のS S 493上の第Ⅲ期面に、後述する第Ⅱ期の屋敷内の参道S S 496と、ほぼ同じ約2.4m幅の砂利敷面を見ることから、第Ⅲ期は第Ⅱ期と大差ないであろう。

第Ⅱ期の門について様子を述べれば、以下ようになる。まず、門の西柱根である240mm×270mmのケヤキの角材が残存する。これは、遺構面下に約600mm埋め込まれた掘立柱である。(この柱には下部に、いかに穴と思われる穴が穿たれている。)そして第16図にみるように、この柱から約2.7m東に、かすかに柱痕らしきものが残る。これと屋敷内に検出された参道S S 496の幅2.4mには、0.3mのひらきがある。主としてこのひらきは、西の柱筋とS S 496西側石列とのずれである。またこの参道の南端には、2個の柱穴が検出されており、これは、前述のように、多少のずれはあるがS S 220の控柱、もしくは扉受けのようなものであろう。とにかく、この門は、間口9尺の掘立柱門であり、たとえば、薬医門のようなものが考えられるであろう。またこの第Ⅱ期には、S A 487の内側にあってS S 496の東に、幅約0.9mの土壇状遺構S X 600も検出されている。

第Ⅰ期の門が、S I 521である。S I 520から約1.8m東へずれ、約0.4m下層に位置する。このS I 521に対応する参道が、一部検出されたS S 497である。幅はS S 496と同じ約2.4mである。

S B 523 S A 487、S A 488、S V 491、S D 500で囲まれた、寺の西部のほぼ中央に位置する第Ⅲ期の建築遺構である。東西約11.25m、南北11.55mの、3間×3間のほぼ正方形の礎石建物遺構である。礎石は大きな自然石で、上面に「+」等の陰刻線を切り、柱据付位置を定めた跡が見られる。基本柱間として、東西方向は東より4.7m、3.75m、2.8m、南北方向は南より、3.75m、3.75m、4.05mの柱間を持つ。この3間×3間を基本として、東・西・南の側柱列は、柱間を2～3分して、密に礎石を配している。また、東西に走る、南から第二列の柱列も同様に、密な礎石配列が見られる。こうしたことから、南を正面とする三間堂のような建物が想定される。その場合は、3.75m幅の南1間分が、外陣的な機能を持つことも考えられるであろう。また、この第Ⅲ期の建築遺構群の南に沿って流れる雨落溝S D 503のほぼ中央、すなわち、門S I 520の正面には、巨大な自然石4個が配されている。これは、このS B 523の東1間分の中央に位置し、S B 523の中央ではないが、向拝様の庇等として考えられるであろう。なお、S B 523の北一間の中央に位置し、中央柱間(3.75)筋より、東西へ約1.2mずつ広く配された礎石は、来迎柱を受けると考えることも可能であろう。このS B 523は、南一間幅を東へ延ばし、S B 524となる。また、S B 523は、すぐ西約1.2mに、方位を同じくして走る柱列があり、それまで延ばして考えることもできる。とにかく、このS B 523は、この寺内において、位置、規模共に、中心的存在を示し、本堂的要素をもつ建築と考えられる。

S B 524・S C 528 S B 523と同じ方位を持ち、この三者は、一体のものとして、第Ⅲ期の

中心をなすものである。* S B 524はS B 523の南一間幅(3.75m)を東へ約8.45m延ばして形成される。この内部には、水利用の施設と考えられる遺構S X 536を持つことを考え合わせると、床を張らない廊状の建築と考えられる。S C 528は、S B 524の南端から約1.1m幅で、北へ約14.1m延びる廊状建築遺構である。そのすぐ東が、寺域を二分する溝S D 500である。このことから、このS C 528は、東の日常生活空間から、この第Ⅲ期建築群の形成する宗教的空間を分離させる重要な機能を持たされた、廊状、あるいは塀様の建物であろう。また、S B 523、S B 524、S C 528、S A 602によって囲まれた空間S G 601は、S B 523の東正面にあって、中庭空間として、重要な機能をもっていたと考える。

S B 525 S B 523の北西に位置し、S B 523と方位を同じくすることから、第Ⅲ期の建築遺構と考えられる。東西約4.7m、南北約3.75mの規模を持つ。持仏堂のような小規模建築とも考えられる。あるいは、S B 526、527と一体の建物になる可能性も残る。一体と考えると、S B 523の西、多少北へずれて、山裾のS V 492まで広がり、それは、ほぼ、S B 523と同じ規模のものとなる。この附近では、第Ⅱ期の遺構面と第Ⅲ期の遺構面にほとんど差がみられなくなり、どちらに属するのかわかりしない礎石も存在する。これらS B 525、526、527、535は、今後の検討課題である。

S B 532 S G 601の、東南一角の約0.5m下層で、検出された第Ⅰ期の礎石建物である。規模は、東西約4.3m×南北4.2m。これらの第Ⅰ・Ⅱ期の建築群は、第Ⅲ期との間に約2°30'の方位のずれがみられる。下層遺構であるため、くわしくはわからない。柱間隔は、南北方向は、南二間が多少狭く、約0.75mで、残り北三間が0.9m程度、東西方向は西より0.75、0.75m、1.5m、1.3mとなる。あるいは、東一間1.3m分を除いて考えるべきかもしれない。とにかく、東・南の側柱列は、上層遺構との関係で調査できなかったが、かなり、小間隔で、礎石を配した、小規模な建物であると考えられる。このS B 532と同レベルで、底に石を並べた溝遺構S D 508も検出されている。また、このS D 508の南に沿って、礎石列S B 533も検出されている。この三者に、参道S S 497、築地様遺構S X 537等が西部の宗教的空間部の下層から検出された第Ⅰ期遺構である。

S B 531・534 S B 523を中心とする、第Ⅲ期建築遺構群の下層約0.2mの所で検出された、第Ⅱ期の建築遺構である。第Ⅰ期建築群と同じ方位を持ち、第Ⅲ期建築群と間に約2°30'のずれがある。S B 531・534は南北方向の礎石列であり、その間、約17.5mを計る。この二列の礎石列のほぼ中心線上にS I 520、S S 496が位置する。また、東側礎石列S B 531の南から二番目の礎石を基準に考えると、その点から直角に西へ延ばした位置が、西側礎石列S B 534として検出された南第一番目の礎石となり、そこから、互いに北へ、約3.0m、3.6m、2.8m、0.9mと、同じ間隔を持って礎石が配される。こうした点から、この二者を一体の建築遺構と考えると、南へさらに、約1.2m拡張して東西17.5m、南北11.5mの大規模な建築となる。またこ

の建物の北に沿って、雨落溝 S D 507も検出されている。

S B 556 発掘区東側に検出された、第Ⅲ期建築遺構である。東半が削平されているため確かな規模は判明しなかった。南北は約 5.7m、柱間隔は約0.95mを計る。建物の西に沿って、雨落溝 S D 515を検出している。また北面隅に隣接して、石積施設 S F 578が存在している。あるいは、庇状のものをかけ出し、取り込んでいるのかもしれない。

S B 550 東部に検出された、第Ⅰ期建築群の遺構である。きれいにたたきしめられた青色粘土の遺構面に礎石据付け痕のみ残す。東西2間・約 3.6m×南北4間・約 6.0mの規模を持つ。南北は約 1.5m、東西は、約 1.8mを基準とする。西へはあるいはすぐ南方の礎石列 S B 551が、北へ延び約 1.2m幅広がるのかもしれない。

S B 554 東部の第Ⅰ期建築群に属する礎石建物である。遺構西側柱列が、上層との関係で未検出であるため、確実な所はわからない。確認されている規模は、東西約 2.8m、南北約 5mである。柱間隔は、東西方向が、約 1.0m・1.8m、南北方向は、約 1.0m等間である。東南隅の礎石上面に、「十六」の墨書番付が検出されている。またこの建物の雨落溝と考えられる、鍵の手に曲る溝遺構 S D 513も検出されている。

S B 555 S B 554の東約 3mの所に位置する、第Ⅰ期の建築遺構である。規模は、小さく、東西一間約 1.9m、南北4間約 3.8mを計る。南北方向の柱間隔は、北で少し狭く約 0.8m、他は約 1.0mとなる。この S B 555の南に素掘りの溝 S D 514が検出されているが、やはりこれも、この建築の雨落溝であろう。この S D 514は西へ延びていて、S D 513の北端が、東へ曲る部分との間に多少のずれがみられる。このことから、S B 554と S B 555の間には、多少の時期のずれがあるのかもしれない。また、礎石列一列ずつの検出であるが S B 557、S B 558の間にも同様の関係が考えられるようである。

S E 562・563・564 東部日常生活空間と考えられる地域で検出された、石積の井戸遺構である。S E 562を除いて、上端が破壊されているため確実な時期決定は出来ないが、ほぼ第Ⅲ期に使用されていたことは確かであろう。S E 562は上部に大きな割り石を縦長に使用する特殊な形体を示している(第15図参照)。この井戸内からは火山礫凝灰岩(笏谷石)製の水槽、石仏及び越前焼甕等の出土を見た。深さは、約 3.1m、口径約0.75m、底に行くにしたがって多少広くなり0.85mとなる。S E 563はかなり崩れて危険なため、底まで発掘出来なかった。S E 564は、S E 562に比し多少広く、口径約0.95m底部は約1.05mと拡がる。深さ約 3.5mを計る(第15図)。この井戸からは、壁土と思われる多量の焼土とともに、五客セットの白磁小皿等の焼物、包丁、ナタ、薬罐の蓋と思われる銅製品などの遺物の出土をみた。

S F 565～ 581 これらは性格は一定していないが、この谷の遺跡内から、必ずといっていいほど検出される石積施設である。この種の遺構は大きく分けて一般に、二種類あるようである。一つは建物に隣接するもの、すなわち S F 578がこれである。他の一つは、屋敷の周辺、土塁

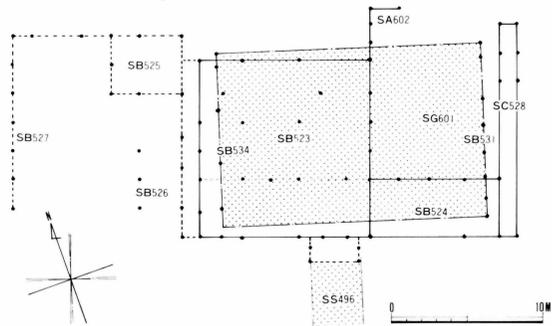
脇等に比較的規則的に配されるものである。S F 569～573等がこれである。性格は、いまのところ不明である。形体は両者共同じて、1 m前後の矩形平面を示し、2～4段程石を積み、深さは種々である。

以上、主要遺構についての、各個の概説を行ってきた。ここで、全体を通して若干の考察を行い、まとめとしたい。

まず、造営年代であるが、下限は、朝倉氏滅亡の、天正元年（1573）と考えてまちがいない。この時、谷中焼き払われたというのが、第Ⅲ期の遺構群はことごとく火を受けているようであり、この焼打ちを物語っている。ところで、この谷内のこれまでの調査によって明らかにされているのは、必ずといって良いほど、それぞれ調査区で大きく分けて三期の遺構群が検出される、ということである。この調査においても、中央のS D 500を軸として、東・西の遺構群のつながりに疑問が残るとしても、やはり三期の遺構群が検出されている。この三期がいったい何時なのであろうか。文献に見られる、大火（文明14年—1482）及び大地震（永正元年—1504）をこれらの改造の時期に当てることができようが、後述する出土遺物から考えられる年代とは一致せず、詳細な解明は今後に待ちたい。

最後に、遺構の状況から、各期における遺構群・建物の性格について若干の考察を加えたい。

まず、ここで第Ⅲ期とした遺構群である。これは、ほぼ中央を北へ向って南北に貫流するS D 500によって二分され、東部は、ほとんど遺構を残さない。井戸S E 562等を若干残すのみである。それに対し、西部は、かなり残存状況が良く、遺構群としてまとめられる。この遺構群の中で、中心をなす建物は、S B 523である。この大規模な3間四方のほぼ方形建物を中心に、S B 524、S C 528等が取り付き、群としての空間を形成する。この建築群の南を東西に東へ流れるS D 503から塔婆等の出土をみたことなどと合わせ考えると、ここが、この寺の中心として、宗教的行事を取り行った遺構群であることは、ほぼまちがいない。建物個々の性格については、西山裾のS B 525～526との関連で多少の変動はあるであろうが、S B 523をその中心建物すなわち本堂と考えてまちがいないであろう。また、日常生活部必須の要素である井戸がS D 500以西に検出されていず、またそれらと密接に結びついていると考えられる、石積施設も東部に集中することなどから、この屋敷の遺構群は、S D 500により機能的に二分はされるものの、相互補完し一体に使われたものと考ええる。すなわち、西半部は宗教的空間、東半部は日常生活空間として使われたといえる。



西部主要建築遺構配置図

つぎに第Ⅰ・Ⅱ期遺構群であるが、この両者は、前述のように方位を同じくし、第Ⅲ期遺構群に対し、約 $2^{\circ}30'$ のずれを持つ。S D 500をはさんで、それぞれの第Ⅰ・Ⅱ期が、対応するかどうかは不明である。東部においては、Ⅰ・Ⅱ期の差がはっきりとは判明していない。東西の遺構群を比較して、まず気付くのは、規模の差である。西では、規模が大きいのにに対し、東部では、規模も多少小さくなり、石積施設等を伴なう。こうしたことから少なくとも第Ⅱ期においても、Ⅲ期同様の機能の違いがみられる。また前述のようにS B 531とS B 534が一体の建築と考えると、S B 523をしのぐ規模となる。こうした点から、第Ⅱ期においてもやはり、寺として機能していたと考えられる。第Ⅰ期については、西半が、ほんの一部の検出であるため不明である。

また、瓦はまったく出土せず、柿板・かや等の植物性のものが屋根材として使用されていたと考えられる。また、かなりの礎石に「+」「田」「-」等の陰刻がみられ、また墨書番付・墨打ち等もみられたが、今後そういった施工法の一部も解明していきたい。

以上のように、戦国時代の地方小寺院の状態をうかがう資料が、かなり検出出来たことは、今後の日本建築史、とりわけ、寺院・住宅史の空白を埋める大きな成果といえるであろう。

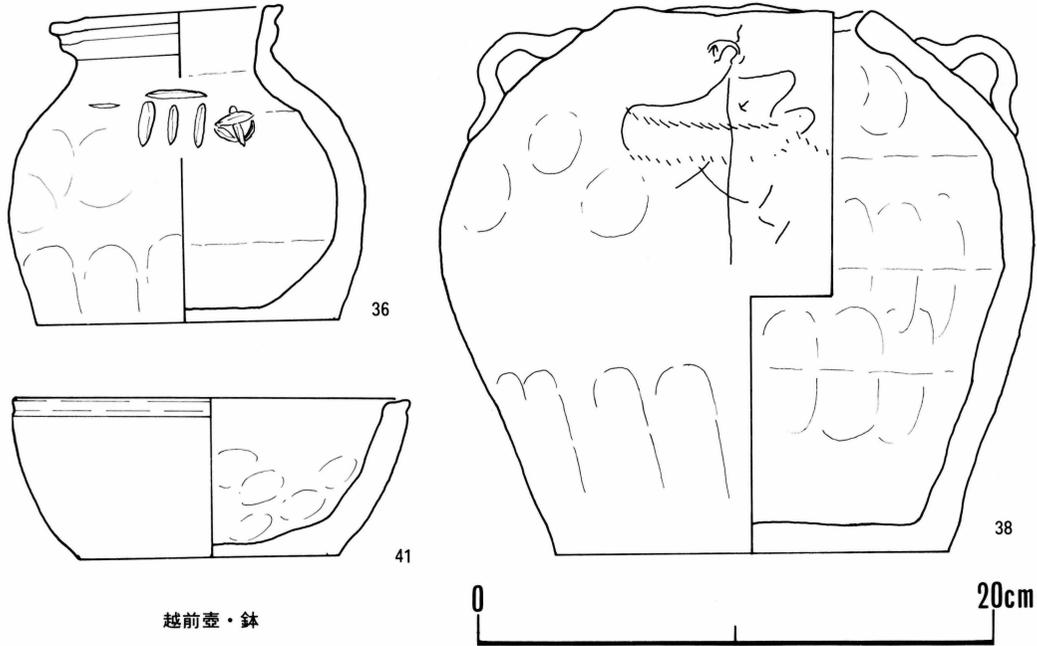
遺 物

越前焼 (P L. 18-36・37・38・39・40・41)

越前焼では壺、甕、播鉢、鉢等ほとんどの器種が、各層から発掘区全域にわたって出土している。遺構は前述のように3期に分けられたが、第Ⅰ期の遺物が少ないこともあって、遺構に対応するような越前焼の時期的な差は認められなかった。

壺類 小形の壺が多く出土した。(36)は、鳶口のついた小壺で、口縁の下と接合部に凹線が回っている。なで肩で底部が大きく、腰のあたりで切断して底部をつけたような印象を受ける。肩に刻印が二つある。(37)はなで肩の小形短頸壺で、底部が大きく厚手である。内側は輪積成形時の痕がよく残っている。肩に『大』の字の刻印が二ヶ所ついている。法量は口径11.5cm高さ14cmを測る。(38)はやや肩の張った底部の大きい双耳壺である。輪積から叩き締めによって成形され、肩は横ナデ、腰部から下にかけてはへら削りによって整形されている。肩から体部にかけて線刻による絵が描かれている。何の絵かは不明。頸部以上を打ち欠いており、その断面を磨いている。(39)も同様に頸部を打ち欠いている。やや肩が張り、腰部が直線的にへら削り整形されている。(37・38・39)は頸部を意識的に打ち欠いている例や、出土地点が北土埜の壇であることから骨壺であったと推定される。(40)も頸部を打ち欠きその断面を磨いている。徳利形の小壺である。大ききの割に器壁が厚い。一見信楽に見間違える程融けきれなかった長石が白く吹き出している壺も数個体出土している。

甕類 口縁の断面が3角で、高さ50cm内外のずんぐりした甕、口縁の高さが7cm程で、やや



越前壺・鉢

外に開いて立ちあがる高さ70cm内外の甕、口縁の断面が3角で高さ90cm（3尺）内外の大甕等が出土している。大甕には肩に井枠に『本』字の押印が回っている。

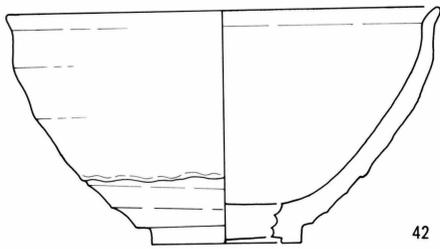
播鉢 口径1尺前後のものが多く、底部近くの播目が磨耗している例もある。(41)は口径15cm、高さ6cmの小形の鉢で、口縁下に一条の凹線が入る。焼成、つくりとも悪い。

瀬戸・美濃製品（P.L. 19-42・43・44・45・46・47・48）

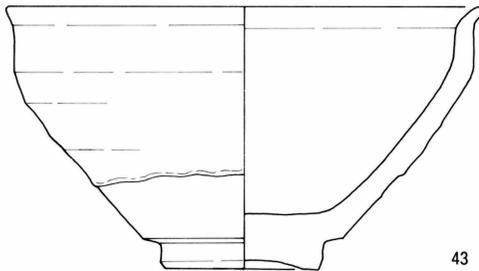
鉄釉のかかったものには天目茶碗、皿、鉢、茶入、舟徳利形の壺、香炉、坏、水注等がある。灰釉には碗、皿、香炉等があるが小皿の出土例が多い。

天目茶碗 やや丸みを帯びるものと直線的なものの2類に分かれる。(42)は前者で、腰部がややふくらんでおり、口縁下のくびれも弱く丸みを帯びている。口端部は軽く外反している。削り出し高台で、高台脇が削られて段をなす。高台内は平らに削り取ってある。胎土は細かい茶褐色の土で、釉には光沢があり、茶褐色と漆黒が入りまじっている。露胎部には鬼板が塗付されている。(43)は後者で立ちがやや高く、腰部はへらで直線的にそがれている。口縁下のくびれは強くいわゆる「すっぽん口」にちかい。高台脇に段を有し、削り出し高台で、内側は丸く削り取ってある。釉調は土であれているが、やや光沢があり、茶褐色をしている。法量は口径12.5cm、高さ7cmを測る。天目茶碗は各層からあわせて120個体程出土しているが、直線的な天目茶碗の方が7：3の割合が多い。口径9cm内外の小天目茶碗も出土しているが量的に少なく7個体以下である。

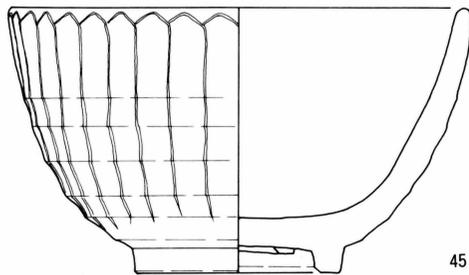
その他口縁部、中央と底部近くに二本づつ横線が入り、口径が14cm、16cmと大きい香炉が出土している。



42



43



45

天目茶碗・灰釉碗



灰釉碗 外側に蓮弁を有するものとなないものがある。(45)は内側は滑らかであるが、外側にはロクロ挽きの痕を残し、剣先の線刻の蓮弁を有する。腰部は高台を削り出す時のヘラ削りの痕が残っている。高台はしっかりしており、内側により土の痕を残す。

その他青磁の写しである千鳥手の香炉、三～四足で、蓋受け状の口縁を有する盤、おろし皿等が出土している。

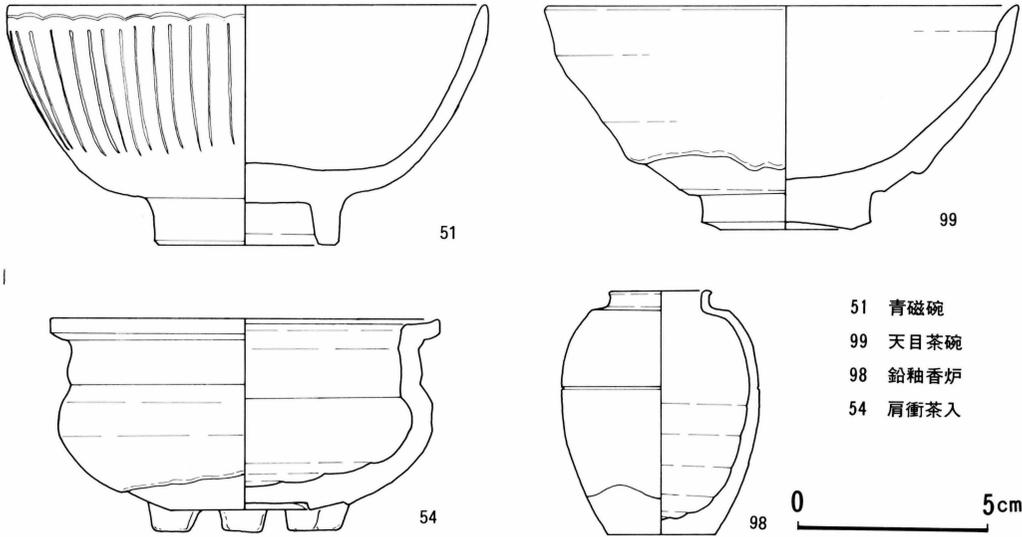
灰釉小皿 7種類程出土しているが、(46)はロクロ挽き成形で端反りの口縁に丸くふくらんだ腰部を有する。高台は削り出しで、断面三角の低い高台を有するものが多い。高台内にはより土の痕が付着している。見込みには菊の印花が押されている。釉調は半透明の褐色がかかった黄緑で、見込みに厚く溜っている例が多い。法量は口径12cm、高さ3cm、高台径6cmを測る。この皿類は大きさにバラツキが少なく、多量に出土することから、規格品として大量に作られているようである。なお、端反りの口縁を有し、見込みは広く印花

も欠いており、削り出し高台で断面は短形なすやや古手と考えられる皿が、古南北溝(S D 502)から出土している。この皿類より青磁小皿の方が一まわり大きいのが、形態的にはよく似ている。また大きさでは、白磁小皿とほとんど変わらない。(47)は(46)と同じ形で大きさだけがやや小さく、口径9cm、高さ2.5cm、高台径5cmを測る。見込みに菊の印花が押されているが、カタバミの印花の例も多い。(大きさからは染付の見込みが十字花文、外側が宝相花唐草文の皿に対応する。)

腰に稜が回る端反りの強い皿や、内湾した口縁を有し、内側にヘラで鋳を入れた皿、口径が2.5cm程の碁笥底(48)の小皿等が出土している。

土師質土器 (P L. 19-49)

土師質皿類 A、B、C、Dの各類が出土している。B類はいわゆる手づくね土器であるが、成形時に肘を使用した痕をはっきりと残すもの、その時肘に布をあてていたのであろうか布痕がついているもの等がある。灯明皿として使用された痕を示すタールがついているものもある。



C類では立ちあがり内側と口縁部外側を横ナデした後見込を横にひとナデした例が多い。C類の多くは灯明皿として使用され、タールが盛り上る程使用されているものもある。D類では古南北溝(S D502)から出土したもののの中に、形態的にD類とC類の中間的なものも見られるが、全体としては古い層から出土した遺物も新しい層からのそれも形式的な差は認められなかった。**土師質羽釜** 10個体近く、出土している。(49)は標準的な大きさのもので口径9cm、高さ7cmを測る。手づくねで本体を作った後、羽を貼りつけたものである。

その他、瓦質陶器の香炉、珠洲焼の壺等が出土している。(50)は無釉の筒形容器である。

中国製陶磁器 (P L, 2、20)

今回の調査により、多数の中国製陶磁器が出土した。その多くは、明代中頃の青磁、染付、白磁の製品であり、青磁の中では、(51)のような線刻の蓮弁文をもつ碗や、小振りの稜花皿が顕著であり、染付では、(52)、(53)のような唐草文をもつ小皿類が多い。白磁では、下手の端反りの皿類がそのほとんどで、大量に使われている。

こうした遺物の中で、2点の唐物の天目茶碗や、今回初めて出土した3点の唐物茶入が注意される。

鉄釉茶入 いずれも肩衝茶入で、(98)はその原形をうかがえる例である。全体に優れたロクロで引かれ、器厚は1.8mmと非常に薄作りで、手取りが軽いのが特徴。直立する口縁はひねり返しがなく、稜のとれた肩へ続く。肩から底へゆるく張り、上半に最大径5.2cmをもち、胴紐1本をめぐらせる。腰からは露胎で、ロクロ目を残す。底は糸切後研磨したいわゆる「スリ底」である。釉は黒に近い黒褐色で一面にかけられ、なだれはない。内面は露胎で、底部から引き上げたロクロ目をそのまま残す。ロクロは反時計回りである。胎土は「鉛土」と呼ばれる、非常に細かい漉土で、表面は灰色、内部は赤茶色。口径2.7cm、器高6.5cm。

天目茶碗 今回の調査で2点、今までの調査では本館跡より3点出土している。これらの中、本館跡出土の一例を除いては、いずれも禾目天目で、器壁の内外面に黄褐色の兎毫文が顕著である。

(99)は「サイゴージ」出土例で、本館跡出土のものに比べ、浅く、開いている。口縁のひねり返しも弱い。釉は青味のある黒色で、茶ないし黄褐色の兎毫文が認められる。高台の観察できる2例を見ると、いずれも削り高台で、高台脇のへら削りの段も明瞭で、高台内は丸く凹面に削っている。胎土には2種類が認められ、灰白色の磁質に近い細かいものと黒色の粒子の荒いものとに分けられる。(99)は前者に属す。釉調との関係では、後者の胎土のものの方が優品のように思える。

朝鮮製陶磁器 (P L. 20)

朝鮮製の陶磁器としては、これまでの調査で確認されている「そば茶碗」風の開いた茶碗(57、58)や、泥灰釉をかけたタタキ成形の舟徳利のような底の大きな瓶(62、63)が数個体ずつ出土した。今回の調査では、これらと共に、高麗象嵌青磁の瓶子(59~61)や三島手の破片(56)が出土した。前者は、へら彫りや印花の中に白泥を入れた鶴首様の瓶子だが、高麗末の三島へ移行する頃のもので、後者に比べて若干古そうである。

その他の舶載陶器 (P L. 2、20)

香炉 外へ屈折した平坦な口縁をもち、少し絞った直立する首から丸く張った腰へ続く、いわゆる「袴腰香炉」の脚を除いたような形で、底は碁笥底風に削り込み、その沿に土玉を貼りつけて三脚としている。釉は暗赤紫色で、口縁から腰までかかる。内面と底部、脚部は露胎で、軟質の肌色をした細かい漉土である。内面には反時計回りのロクロ痕が残る。

水滴 オシドリと思われる水鳥を形どった水滴で、背の中央と嘴の下に直径5mmの穴がある。腹から足にかけて欠損する。釉は火を受けて原状をとどめないが、全面に交趾三彩特有の鉛釉が施してあったと推定される。成形は、縦に半分ずつ内面から型へ押しつけて作られ、内部に指の跡を残す。

黄褐色釉四耳壺 口径12.2cm、底径15.3cm、高さ39.1cm。ずんぐりとした大壺で、玉縁の口縁から2、3段の段をもって肩へ続く。肩の上に粘土紐を貼りつけた4耳があり、その間に「大吉」の刻印が4つ押されている。肩は丸く、なだらかに胴へ続き、そのまま底へすばまる。あらくロクロで成形された後、タタかかれているらしい。胎土には鉄分が多く、腰から下の露胎部では赤く焼けている。釉は黄褐色で、肩より上は赤味が強く、肩から胴は緑味が強い。胎土からの鉄分が釉下に滲み、全体にムラムラとした調子を出している。内面は口縁から肩の裏までに釉がハケで塗られている。

いわゆる「呂宋壺」と呼ばれる茶壺である。茶会記等に「清香」、「王」、「祥」等の文字や花文の印刻を乳の間にもつ茶壺が認められるが、「大吉」も吉祥句で、そうした例のひとつであ

る。先に述べた唐物の茶入、天目茶碗と合わせ、この持主の唐物趣味がうかがえる。

金属製品（P L. 21）

包丁 長さ21cm、最大幅 6.1cmの半月形の身部に、長さ 9.6cm、太さ 2.8cmの木製の柄がつく。元重ね 2.9mm、丸鋒である。柄は切断や削りも粗末である。菜切用であろう。

鉈 全長25.6cm、刃長17.2cm、最大巾5.5cm、平鋒で厚さ0.8cm、茎は 7cmで末端近くに直径0.63cmの目釘穴をもつ。全体に火を受けており、柄は残らないが、直径 3.0cmの責金具を伴う。包丁と共に井戸（S E 594）より出土したものである。

水滴 52×30×12mmのうすい方形の箱に、13×9×6.5mmの方形の口をつけている。箱の上面はゆるく盛上りを見せて首につながる。厚さ0.6mmの銅板を折り曲げ、接合はろうづけと考えられる。

同じ作りの水滴で、63×29×13mmの例も出土している。

菊花透しの鍔 8.6×6.2cmの15弁より成る菊花形の透し鍔で、小柄櫃と笄櫃をもたない。切羽台は4.3×2.2cmで、中央孔は3.6cmを後に2.9cmに改めている。火を受けて表面が荒れているが各弁の間には刻線が認められ、本来は象嵌が施してあったと推定される。本館の外濠底出土の車透し鍔と共に、この時代に流行した透し鍔の好例である。

銃弾 発掘区の北部より、火縄銃に関連した遺物が一括出土した。銃弾は、全て鉛製で、バラツキがあるが、大小 2種類に区分できる。大は、21～21.5mm、51.1～51.6gのもので23個、小は、11.7～12.4mm、平均8.58gで224個出土した。この計測値から推定すると、大は径7分、小は径4分に近い。これらの銃弾は、型合せ痕による直径を計測しても、かなりのバラツキをもっており、精度は低い。こうした精度の低さは、一般的な傾向であるらしく、山中城の遺物でも指摘されている（三島市教育委員会1976「史跡山中城跡Ⅲ」）。山中城の鉛弾の径の平均は、3.61分で後者に近い。

鉄製ルツボ 完成した銃弾を入れた状態で2個並んで出土した。いずれも下ぶくれのいちじく形で、胴下部に最大径12.4cm（4寸）をもち、残高は12cmである。底はわずかにあがっている。器壁は長い使用のため荒れているが、厚さ0.2～0.3cmである。铸造であろう。

鉛棒 半截した竹に流し込んで作ったカマボコ形の棒で、銃弾の原材料と考えられる。長さ11.7～18cm、幅は1～2cmのものが多い。重量は27.8g～213gで、長さ、重量とも各々バラバラで、57本が束ねられていた。全重量は3760g（1貫）で、1束として意味をもっていたようである。途中から融けているものもあり、ルツボを使って銃弾を製作していたことが予想される。

火縄挾 2例あり、いずれも黄銅製で、各隅を面取りした断面八角形である。1例は全長13.6cmで、末端の引金のピンのあたる部分が伸びており、1例は全長13.9cmで、末端が輪になっている。支点の目釘穴からの先端と末端への長さが2例とも8.5cm（2.8寸）、5.4cm（1.8寸）と同じ長さで、交換できる規格部品であったことを推定させる。先端の火縄を挟む溝の幅も0.5cm、

0.58cmで近似する。2例とも長期間使用されていたもので、火縄を挟む部分に火薬の燃えかすが付着する。

この他にも、毛抜金具や火縄銃の部品と思われる金具が1点あるが、どこに使用されたものか不明である。

以上の火縄銃に関連した遺物は、銃弾を入れたルツボ2点を中心に、鉛棒と火縄挾等の金具が束ねられて出土したものであり、銃弾の製作や、簡単な部品の交換等をする場所であったと考えられる。なお、ルツボの脇には、白磁の皿が3枚重ねて伏せてあった。

木製品（P L. 22）

木製品では、漆椀、櫛、小形曲物、下駄、竹行李、鐙のミニチュア、卒塔婆等が出土した。漆椀には、黒漆地に朱漆で文様を描いたものと、朱漆のものがあり、後者の方が上質である。竹行李は、内側に渋紙を貼っていた。

卒塔婆 石積溝（S D 503）等から出土したもので、火を受けた断片が多い。（92）は頭部が不明で『憲法橋 盆追善』と墨書され、裏面には梵字が書かれている。（93）は、圭頭で、3段の刻みをもつ。頭部に太い黒線を入れ『南無妙』と墨書されている。（94）は五輪塔形で、『キャ・カ・ラ・バ』と梵字で五輪塔の大円鏡智、発心門の種子が墨書されている。

石製品（P L. 22）

石製品で最も多いのが、「バンドコ」と呼ばれる火炉と、各種の鉢類で、石仏、石塔がこれに次ぐ。これらはいずれも地元の笏谷石（火山礫凝灰岩）を用いており、それ以外の石材では、茶臼、硯、数珠の玉等がある。数珠の玉は水晶製である。

石塔・石仏 石塔では一石五輪塔が最も多く、組合せ五輪塔、宝篋印塔がわずかにある。石仏では地蔵菩薩を刻んだものが最も多いようである。五輪塔を線刻した板碑もあり、いずれも紀年銘をもつので、今後の良い資料となる。また発掘された石仏、石塔は地中にあったため、保存が良く、一乗谷に露出して分布するものには少なかった丹や金箔、墨書等が認められるものが多い。（95）はその1例で地蔵菩薩の衣文のひだや銘の線刻部に漆を用いて、金箔が押され、蓮座の部分には丹が塗られている。（96）は供養板碑で、中心に如来座像が彫られ、その下に「三界万霊六親眷属等」とあり、その周囲に一族と思われる法名が並ぶ。これらの石仏、石塔の一部は、北土墨裾や西側山裾に立並んでいたのが確認された。

木製卒塔婆や多数の石仏、石塔の出土により、「サイゴージ」と通称されるこの地が、寺跡であることが確認された。また卒塔婆の墨書、五輪板碑の種子、銘の第1字に「妙」の多いことから、この寺が日蓮宗と推定できる。造営時期についても、Ⅱ期の石積溝の側石に「天文13年」銘の石塔が使用されており、Ⅲ期の整地土中や、遺溝にも石仏が多い。これらによってⅠ期から寺として創建され、Ⅱ期の造営が天文13年以降にあったことがわかる。その後Ⅲ期に至り、天正元年、兵火に滅亡した。

整 備

昭和50年度は、中の御殿跡の北半分と湯殿跡庭園との間の空濠をあわせて2000㎡、第15次発掘調査地の武家屋敷跡1880㎡を、芝張、花木や草花の植栽、アスファルト・ソイルセメント・碎石・砂利などの舗装で整備するとともに、宇齋藤の武家屋敷跡にスイセンとヤマブキを主体とする、1500㎡の草園を造成した。また銅製の説明板・花崗岩製の説明石柱を設置した。

中の御殿跡整備工（P L、23、第17図）

中の御殿跡の南半分は、発掘調査のうえ、昭和48年度に遺構の保存整備がすすんでいる。今回は残りの北半分と空濠を整備した。整備前の発掘調査は、昭和49年度に実施された。

整備は南側と同じような手法で行い、建物跡の礎石は露出展示することにした。礎石ぬきとり穴が検出されたものは、新に天端の平な現地の石を補充して復原した。東側土塁斜面裾に沿う遺構の南北溝を、排水溝として活用することにした。溝の底は、5cm厚のモルタルでかため、側石の欠損部は新に石を補充して修復した。ほかの溝は、側石保存のために埋めもどした。

建物跡周辺の平坦な部分には、平均約10cmの厚さで、下層に山土を上層に山砂を盛土整地して、高麗芝を植栽した。また遺構のないところに緑陰樹としてケヤキを、観賞用にハギを植栽した。空濠と西側斜面に面する縁沿いには、観賞と屋敷の区画の表示をかねて、3㎡あたり9本（サツキ6、ツツジ1、ハクチョウゲ1、ジンチョウゲ1の割合）で2列に列植した。

東側土塁の上段斜面には、チゴザサを30cm間隔で筋状に植栽した。下段の急斜面には、種子吹付緑化工を行うとともに、落石防止のため、ビニール被膜した暗緑色の金網（網目5cm）をアンカーで固定し設置した。種子吹付緑化工は、在来の種子（ヨモギ・ヤマハギ・キキョウ混合）を25g/㎡、被膜養生剤エスフィックスを1000g/㎡、ファイバーを180g/㎡、肥料（高度化成肥料N10・P15・K12）を200g/㎡の割合で混合施工した。

空濠には木橋がかけられてあったが、景観上好ましいものでなかったのとりはずし、それにかわるものとして湯殿跡の西南側に幅50cmほどの園路を設けた。斜面の下方に焼丸太を打ち、竹でしがらみを組み盛土・ソイルセメント舗装して造成した。この園路は、歩行できるようにソイルセメントで舗装した濠底を經由し、湯殿跡庭園南石垣見学のため石垣に沿って設けた園路に続く。この園路から先には、飛石と石段を配置し、中の御殿跡に連絡するようにした。

飛石周辺の湿地には、カキツバタ・ハナショウブ・アジサイを、空濠の斜面にはヤマブキ・ハギを観賞用に植栽した。ハナショウブの品種は、児化粧・香爐峯・大和錦・紅芙蓉・万戸声・鳳輦・旭丸・浪花津・桃源・眠獅子・千年の友などである。

中の御殿跡の西北部で、西面する野面石積の石垣が発掘されたが、石の風化がはげしく、写真測量を行った後うめもどした。東土塁の北面・西面の石垣は、写真測量の上補修した。

武家屋敷跡整備工（P L、24、25、第18図、19図）

西側の武家屋敷跡と同様な手法で整備を行ったが、建物・通路・石積施設などの遺構を除いた部分は、砂利敷舗装にかえて高麗芝を植栽した。芝張にしたのは、将来一乗谷川沿いに道路が新設され、悪化するであろう環境を少しでも緩和しようと考えたからである。

礎石を用いた建物跡は、黒色のアスファルトブロックで縁どりし、内部は5cm厚の碎石基礎と5cm厚のアスファルトで舗装した。掘立柱を用いた建物跡は、茶色のアスファルトブロックで縁どりし、内部は5cm厚の碎石基礎と10cm厚のソイルセメントで舗装した。下層の建物跡は、うめもどし上方に茶色のアスファルトブロックで縁どりし、内部は10cm厚のソイルセメント基礎に珪石を5cm厚で化粧敷して、平面復原した。ソイルセメントは、山砂0.2m³にセメント40kg、ソイラーP 1kgの割合で混合したものである。

土塁は石垣を補修・盛土して高麗芝を植栽した。石積施設、溝は側石を修復し、底はソイルセメントで舗装強化した。通路跡には細砂利を化粧敷した。障壁跡は、積石を補修、上面にソイルセメントを充填強化した。柵跡には、長さ70cm・一辺12cmのヒノキの角材を、門の掘立柱穴跡には、長さ70cm・一辺15cmのヒノキの角材をそれぞれ30cmほどうめこみ、掘立柱の一部を復原した。木材の表面には、防腐材のウッドエースを塗付した。

井戸枠は、発掘した井戸枠片から2種類の型式が判明したので、それぞれ出土材と同じ火山礫凝灰岩（笏谷石）で計6基復原設置した。A型は井戸枠上端・下端四隅外方に突起をもつもの、B型は下端に突起をもたないものである。

庭跡の砂利敷のところには、細砂利を補充化粧敷した。植込であつたと推定される、庭石でかこわれ一段高く盛土された、砂利のなかった所にはツツジとサツキを植栽した。

遺構のないところには、緑陰樹や観賞用としてサクラ・アカマツ・カエデ・ツバキ・シダレヤナギ・ケヤキなどの高木とハギを植栽した。屋敷西北側の石列でかこまれた低地の滞水地にはカキツバタを、汀にはハナショウブを、さらに乾燥地にはアヤメを植栽した。

草園造成工

一つの屋敷跡を表示するため、屋敷の境界と推定されるところに、ヤマブキを2mおきに2列で列植した。内部には幅1.2mのソイルセメント舗装の園路を、周辺と中央に総延長150m分を設けた。園路に沿って、幅20cmのU字溝を伏設した。東側には畝をつくってスイセンを列植、西側には250m²の芝生の休憩緑地を造成した。

説明板・石柱工（P L、23）

銅製説明板2基と、遺構表示石柱48個を設置した。銅製説明板は、厚さ3mm・1m角の銅板に、塩化アンモニウム10%水溶液の電解腐蝕とメラミン焼付塗料で文字や図を表示し、表面にウレタン樹脂被膜を施したものである。石柱は大きさ35×30×20cmの花崗岩の角をカット・磨いて文字を彫ったものである。

は、「一昨日於越前國合戦有之云々。信長衆千餘人討死云々、慥無注進之間不詳」（元亀元年四月廿七日条）と伝えている。この時の合戦で朝倉方は五百余、信長方は千五百余人が討死したと伝えられている。

この四方仏は正しくこの合戦での戦死者の霊を弔ったものであり、かつ合戦の戦死者を「爲自他討死……」とある如く、敵・味方の別なく供養したものであることが知られる。このことは、これまで一乗谷の石塔・石仏が、戦死者の供養の為に造立されたものであるとしてきたことを裏付けるものであろう。又各面の実名・法名はこの四方仏の施主或は被供養者の名と考えられるが、正面の「富田彦□^(九カ)」は、この合戦の朝倉方戦死者の中に「富田中務丞^(九カ)」があって、その一族が、彼の供養の為に造立したのではないかと思われる。「元亀元年四月廿五日 越前敦賀郡天□□^(簡山カ)……」の銘をもつこの四方仏は、織田信長の第一次越前侵攻についての朝倉側の唯一の史料である点、それが、一乗谷に残存している点、石塔・石仏造立の思想的背景を窺える点、一乗谷に所在する石造物の中では特異な型式である点等、貴重なものである。

西新町には3体のほぼ同型の石仏がある。内2体には、「五番河内藤井寺（裏に南無阿弥陀仏）」（Ni 145）、「卅二番同観音寺」（Ni 142）の銘があって、西国三十三ヶ所札所巡りに対応した石仏が、当時一乗谷において造立されていたことが窺われ、同時に、地藏信仰・阿弥陀信仰と共に観音信仰も盛んであったことが知られよう。

鹿俣最勝寺にある円柱には、「南無阿弥陀佛 沙門真忠 開山□^(御カ)廟前石燈籠天文三〇二月時正□^(願カ)主敬白」の銘があって、この円柱が、最勝寺開山の墓前の石灯籠の竿の部分であることが分る。一乗谷にあった全ての寺院に開山御廟があったかどうかは即断できないが、少なくとも最勝寺にはあったことが考えられる。ただ最勝寺所在の五輪塔のどれが、開山御廟に相当するものであるのかは未だ定かではない。今後の調査にまちたい。

今回の調査で人名の分ったものが前述の鹿俣の四方仏の他にもあった。石造遺物には多く法名が記されて実名が記されることが稀であり、且つ実名は調査の手掛りになり易いので提示してご教示を得たい。光照寺の千手観音（K28）には「上町江上秦左衛門盛念……永禄二年九月十一日」なる銘があり、枋泉愛宕神社の四角柱には「薬師如来 天文十一年卯月八日 願主大町左近助^(カ)」の銘があった。

変ったものとしては、上東郷に、阿弥陀・勢至・阿閼・観音・大日を刻したものがあったが、これは、十三仏（不動明王・釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩・地藏菩薩・弥勒菩薩・薬師如来・観音菩薩・勢至菩薩・阿弥陀如来・阿閼如来・大日如来・虚空藏菩薩）の中の五尊が残存したものであると思われる。後掲の写真の如く多くの銘が残存しているものの全体が判明し得ないのは残念なことである。

研 究 所 要 項

I 事業概要

1. 研究事業

イ. 朝倉氏遺跡発掘調査

第15次（武家屋敷跡）、第16次（一乗小学校）、第17次（寺跡）

ロ. 朝倉氏遺跡環境整備

中の御殿跡（北半分）、武家屋敷跡、草園造成

ハ. 石造遺物調査

ニ. 古文書調査

ホ. 現地説明会

第15次発掘調査
1975年10月5日 担当 水野

2. 外部調査指導

イ. 柚山城跡（南条郡南条町）

1975年6、8、11、12月 藤原、小野、吉岡、岩田

ロ. 王山古墳（鯖江市）

1975年9月 藤原

ハ. 高森遺跡（武生市）

1975年4月～8、10月 河原

ニ. 遠敷遺跡（小浜市）

1975年8月 河原

ホ. 塩田城跡（長野県上田市）

1975年6、8月 河原

ヘ. 平泉寺石仏調査（勝山市）

1975年10月 水藤

3. 朝倉氏遺跡調査研究協議会

1975年10月24、25日 於 福井
「朝倉氏遺跡発掘整備第3次5ヶ年計画について」

4. 特別史跡地内現状変更申請について

申請件数 10件
主な理由と面積 家屋新築、庭造成等 308㎡
発掘、整備、その他 26625㎡
計 26933㎡

II 予 算

発掘調査費 22000千円(国庫補助5割)
環境整備費 15000千円(国庫補助5割)
研究所費 805千円
計 37805千円

III 組織規定

福井県教育委員会行政組織規則 抜萃

（昭和46年6月1日
福井県教育委員会規則第5号）

改正 昭和46年12月23日教委規則第12号

昭和47年4月1日教委規則第3号

昭和47年10月24日教委規則第8号

第二節 出先機関（設置名称等）

第13条 出先機関として、支局、へき地、複式教育事務所、特殊教育推進事務所および文化財事務所を置く。

2. 出先機関の名称、位置および所管区域は、次表のとおりとする。

| 機関の区分 | 名 称 | 位 置 | 所 管 区 域 |
|--------|----------------------|-----|------------------------|
| 文化財事務所 | 福井県教育庁 朝倉氏遺跡調査研究所 | 福井市 | 福井市（特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の指定区域） |

（出先機関の所掌事務）

第15条 各出先機関の所掌する事務は、次表のとおりとする。

| 機関の区分 | 所 掌 事 務 所 |
|-------|--|
| | 1. 史跡の発掘および発掘技法の研究に関すること。 2. 史跡の環境整備および遺構修景の研究に関すること。 3. 史跡の出土品の調査および研究に関すること。 4. 中世史の研究に関すること。 |

附則（昭和47年4月1日教育委員会規則第3号）

この規則は昭和47年4月1日から施行する。

IV 職 員（昭和51年3月31日現在）

| 氏 名 | 官 職 | 担当 |
|------|----------------|----|
| 河原純之 | 教育庁技術職員 所長 | 考古 |
| 藤原武二 | 教育庁技術職員 次長 | 造園 |
| 水藤 真 | 教育庁技術職員 文化財調査員 | 歴史 |
| 水野和雄 | 教育庁技術職員 文化財調査員 | 考古 |
| 小野正敏 | 教育庁技術職員 文化財調査員 | 考古 |
| 岩田 隆 | 教育庁技術職員 文化財調査員 | 考古 |
| 吉岡泰英 | 教育庁技術職員 文化財調査員 | 建築 |
| 南洋一郎 | 研究補助員 | |
| 吉越 強 | 事務補助員 | |



第15次調査発掘遺構



第15次整備状況

東北から



◀ ルソン壺



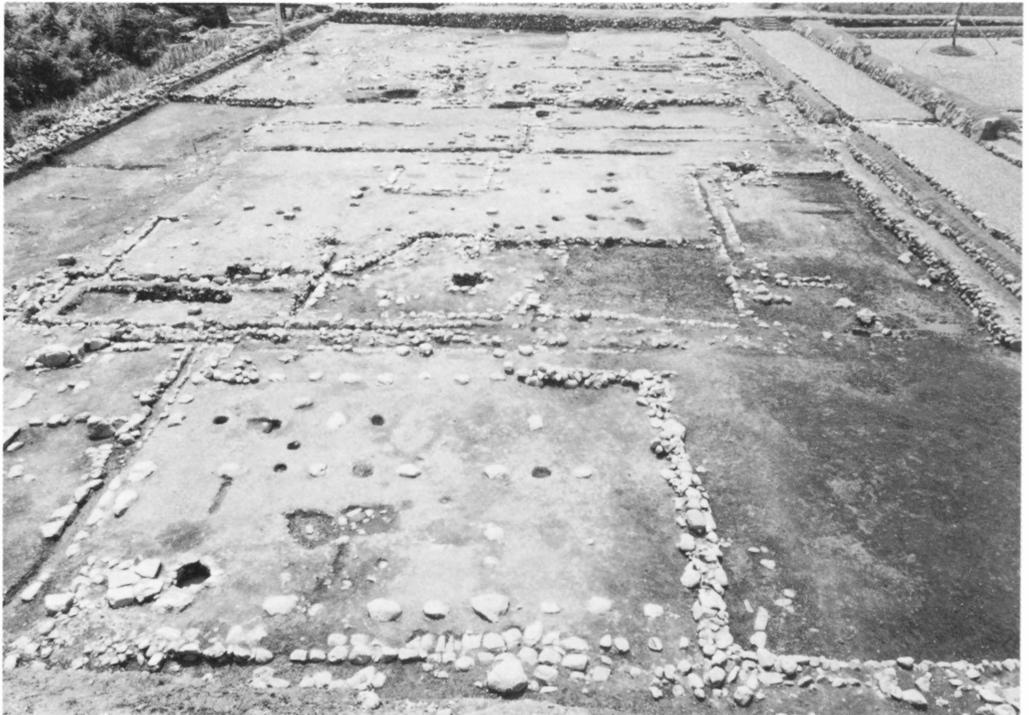
▲ 唐物茶入



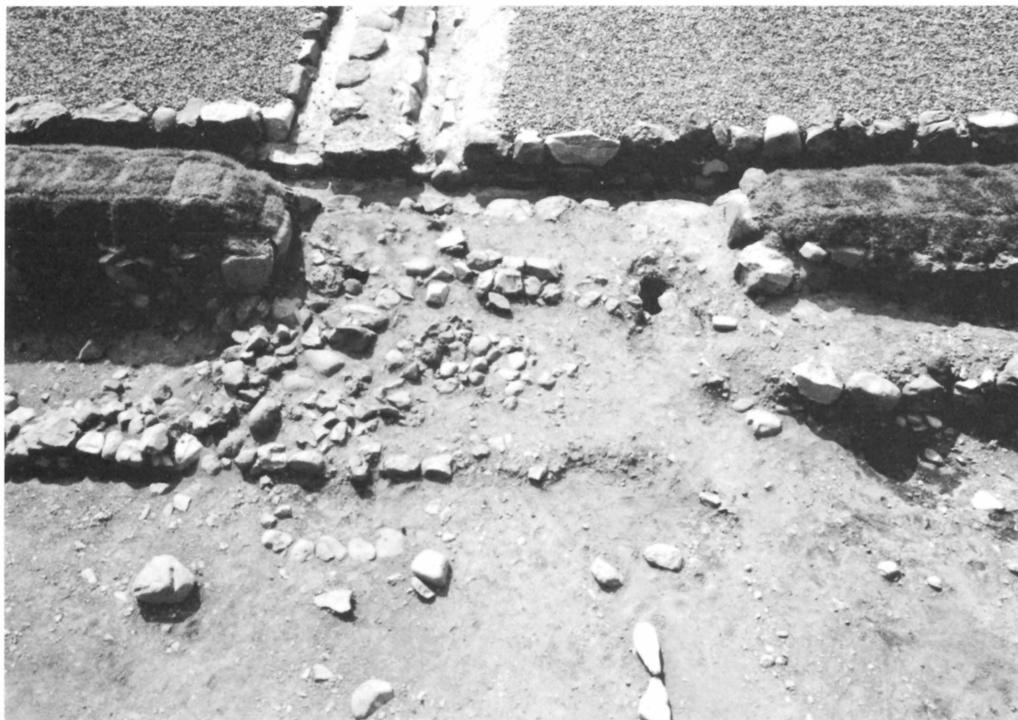
唐物天目茶碗 ▶



全 景 西南から



全 景 北から



門 SI 279 東から



土 壘 SA 383 , 通 路 SS 386 北から



礎石建物 SB 405 , 門 SI 415 東から



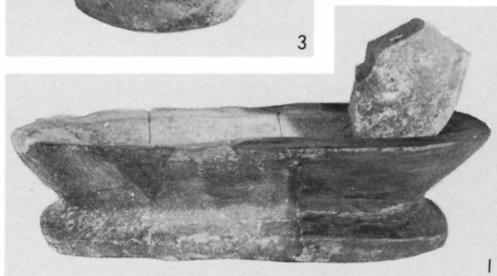
建物 SB 407・408・409 南から



石積施設 SF 466 , 井戸 SE 435 ・ 431



土 埧 SK 452 北から



越前焼 1. 菜研 3. お歯黒壺 4. 壺 6~9. 大甕



19



17



20



12



21



13

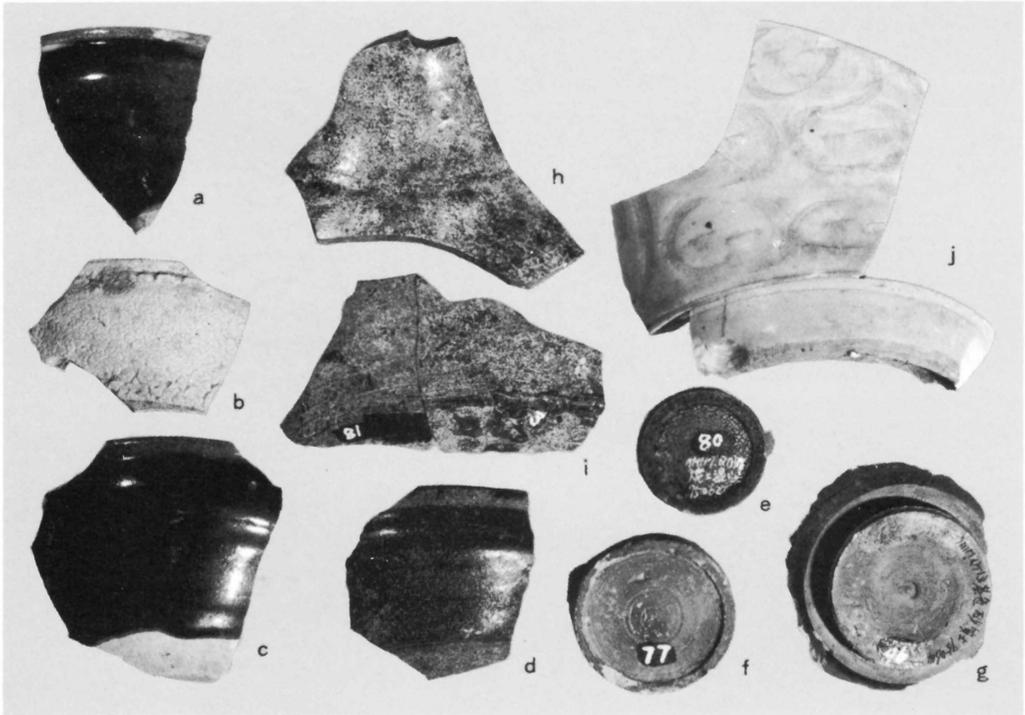


22

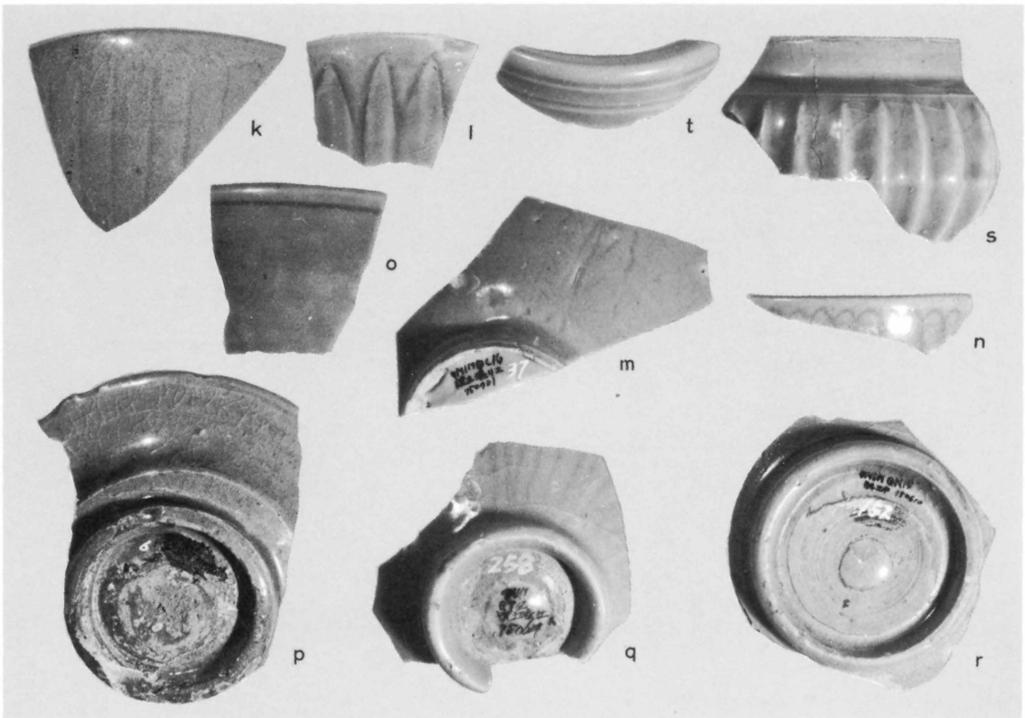


10

土師質土器 10. 羽釜 美濃・瀬戸焼 12・13. 皿 17. 小壺 19~21. 茶入れ 22. 天目茶碗



美濃・瀬戸焼 天目茶碗 朝鮮製陶器 中国製磁器 梅瓶



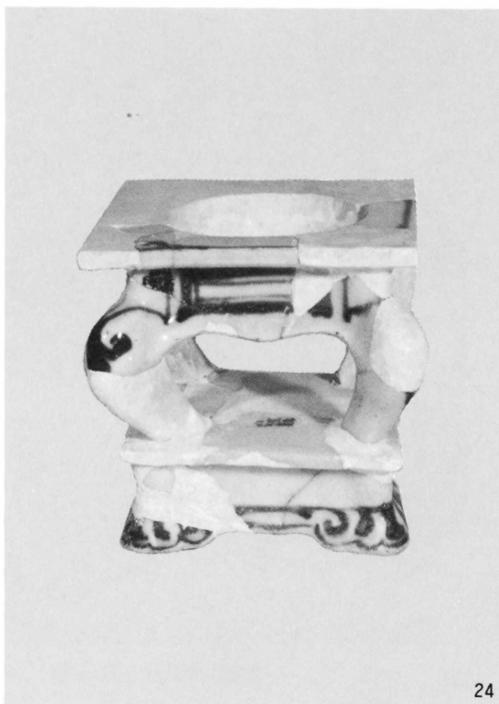
中国製青磁 皿・碗・香炉・壺



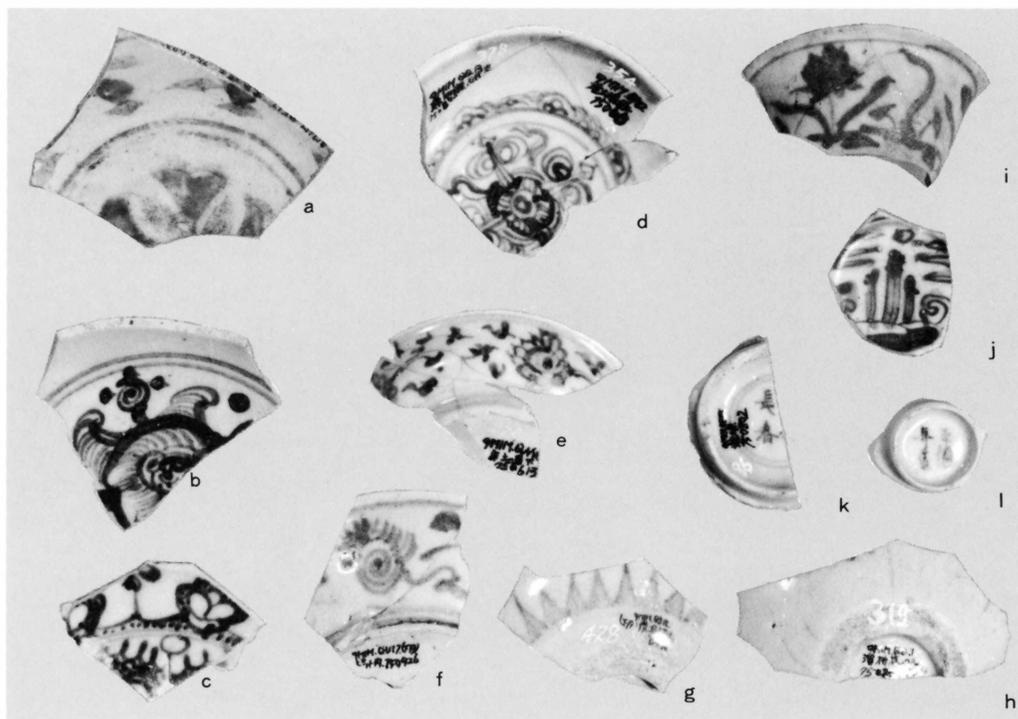
25



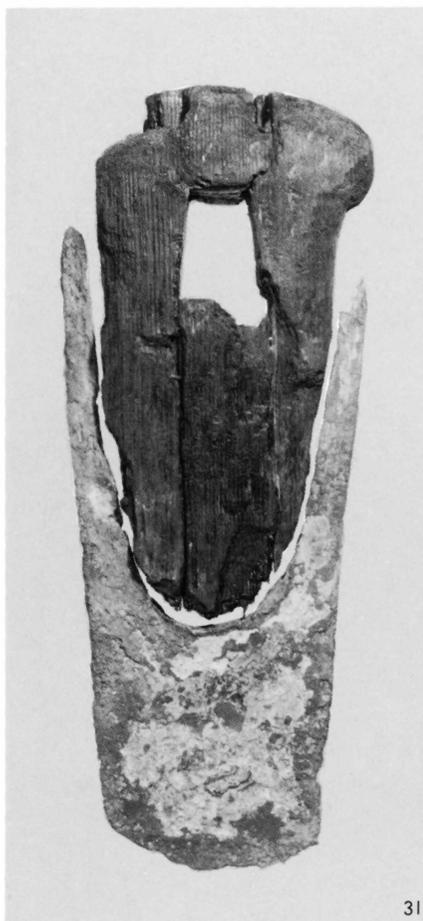
26



24



中国製染付 24. 承台 25・26. 皿 下写真の左上、赤絵皿



31



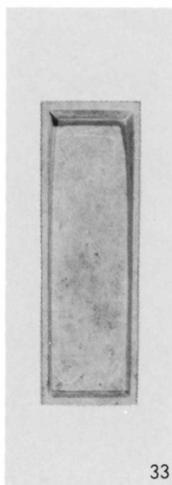
29



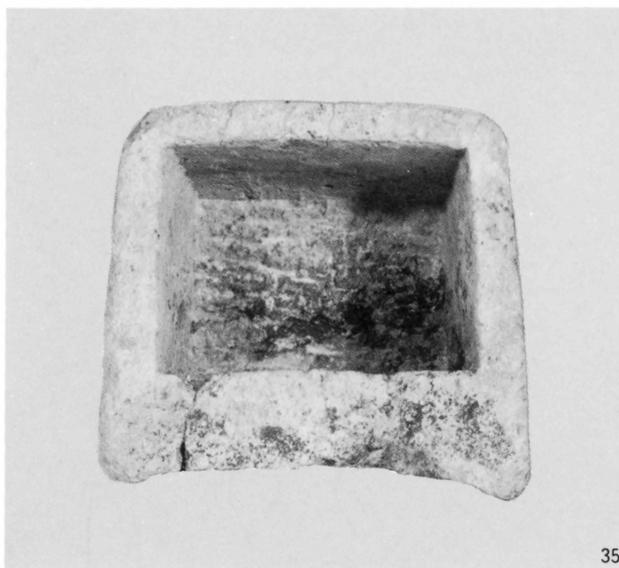
30



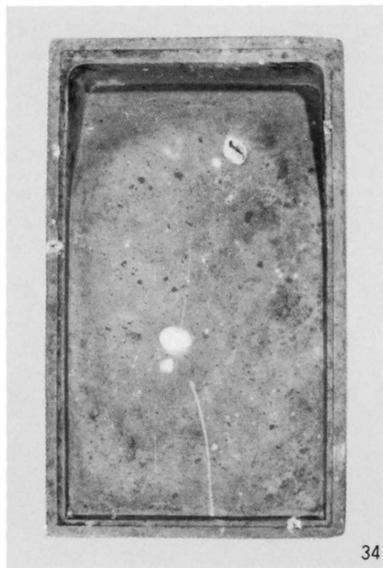
32



33



35



34

鉄製品 29. 銅環 30. 分銅 31. 鍬先 石製品 32~34. 硯 35. 火炉



全 景 南西から



礎石建物 SB 523 南から



東部下層遺構 東から



土塁 SA 487・488，礎石建物 SB 523 北から



土塁 SA 487 門 ST 520 通路 SS 493・496 北から



上 礎石建物 SB 531・532・533
溝 SD 508 南から
左 溝 SD 500・502
北から



上 石積施設 SF 578 北から
右 石積遺構群 北から
右下 井戸 SE 564 西から
下 井戸 SE 562 東から





36



37



38



40



39



41

36 越前壺
 37 越前壺
 38 越前壺

39 越前壺
 40 越前壺
 41 越前鉢



42



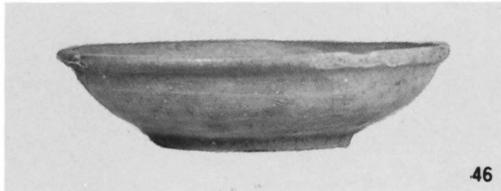
43



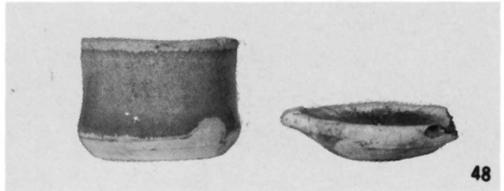
44



45



46



48



47



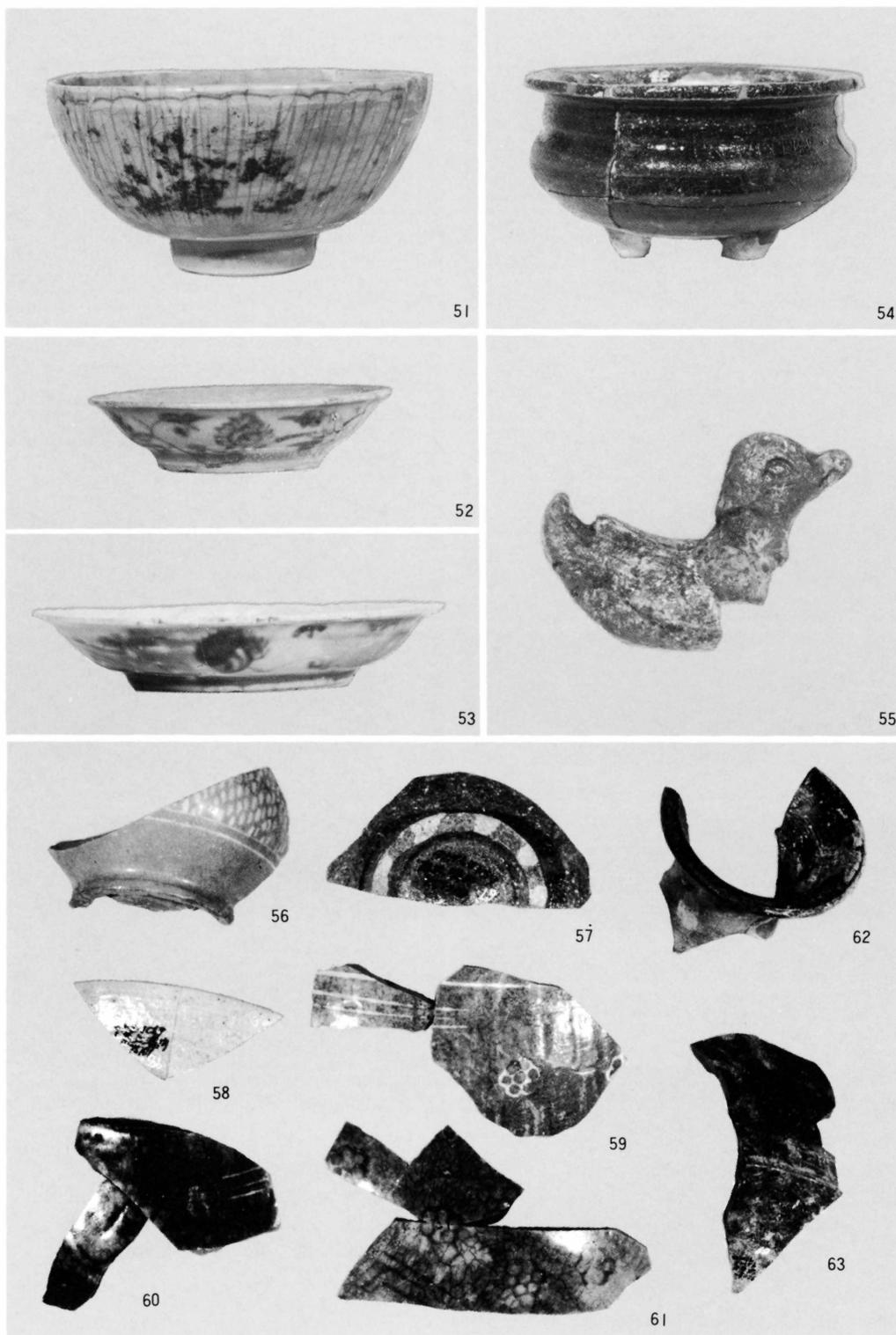
49



50

- | | |
|---------|-----------|
| 42 天目茶碗 | 47 灰釉皿 |
| 43 天目茶碗 | 48 灰釉・坏・皿 |
| 44 茶入 | 49 土師質羽釜 |
| 45 灰釉碗 | 50 無釉筒形容器 |
| 46 灰釉皿 | |

2 : 1



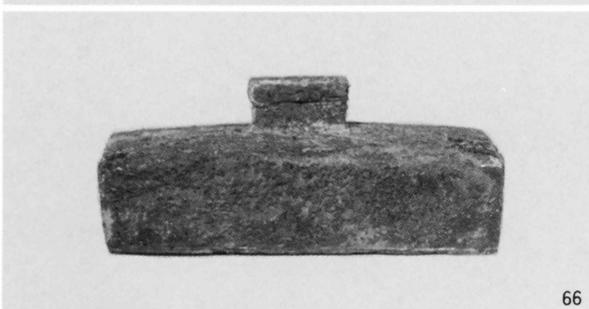
51~53 中国製磁器 54・55 その他の舶載陶器 56~63 朝鮮製陶磁器



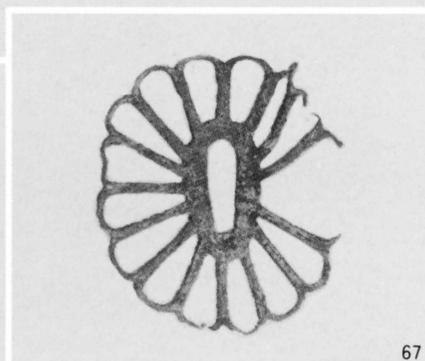
64



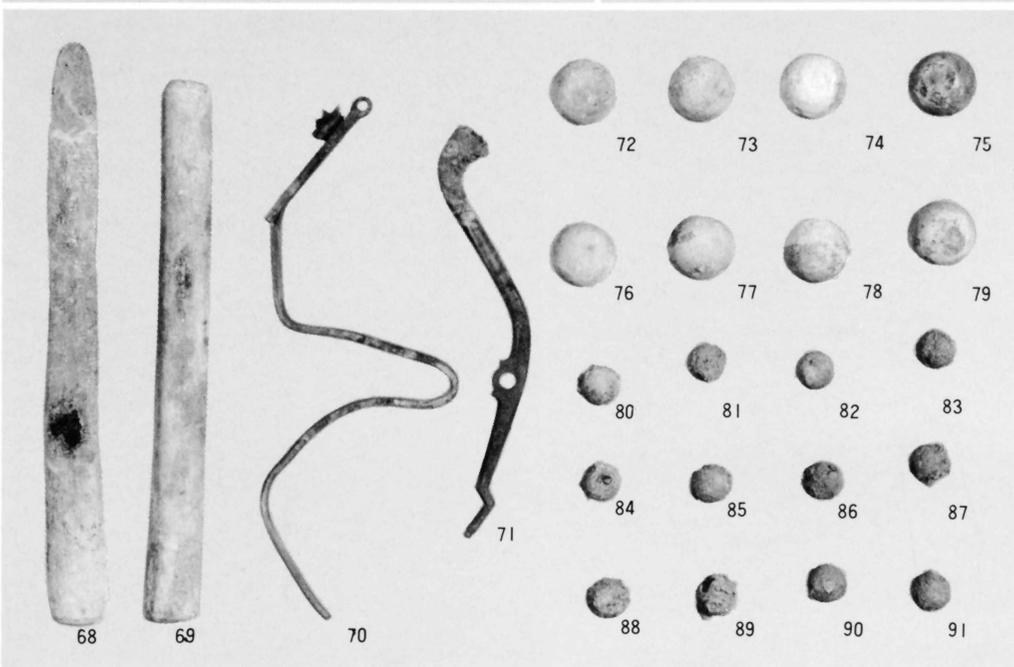
65



66



67



68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

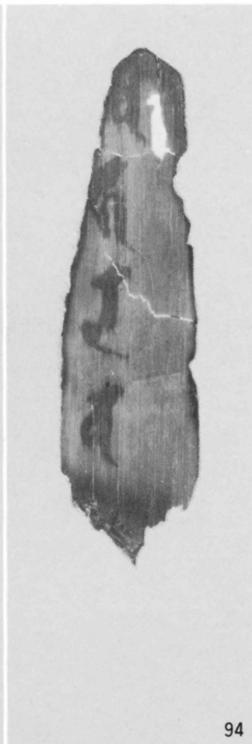
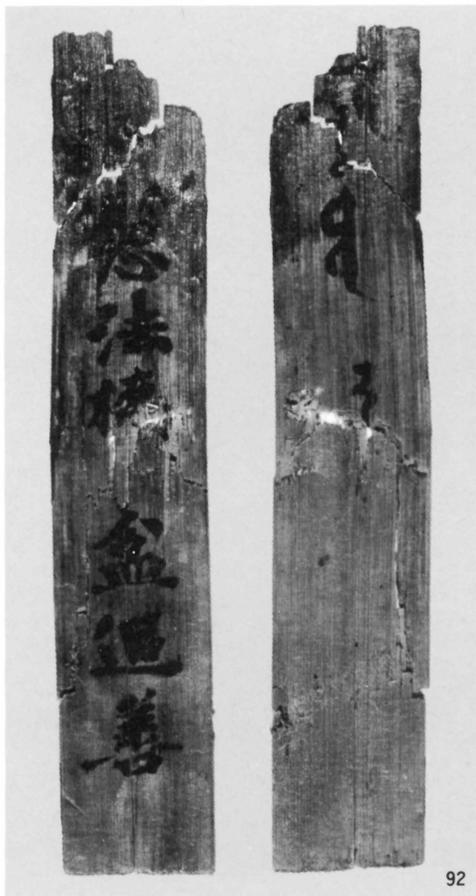
88

89

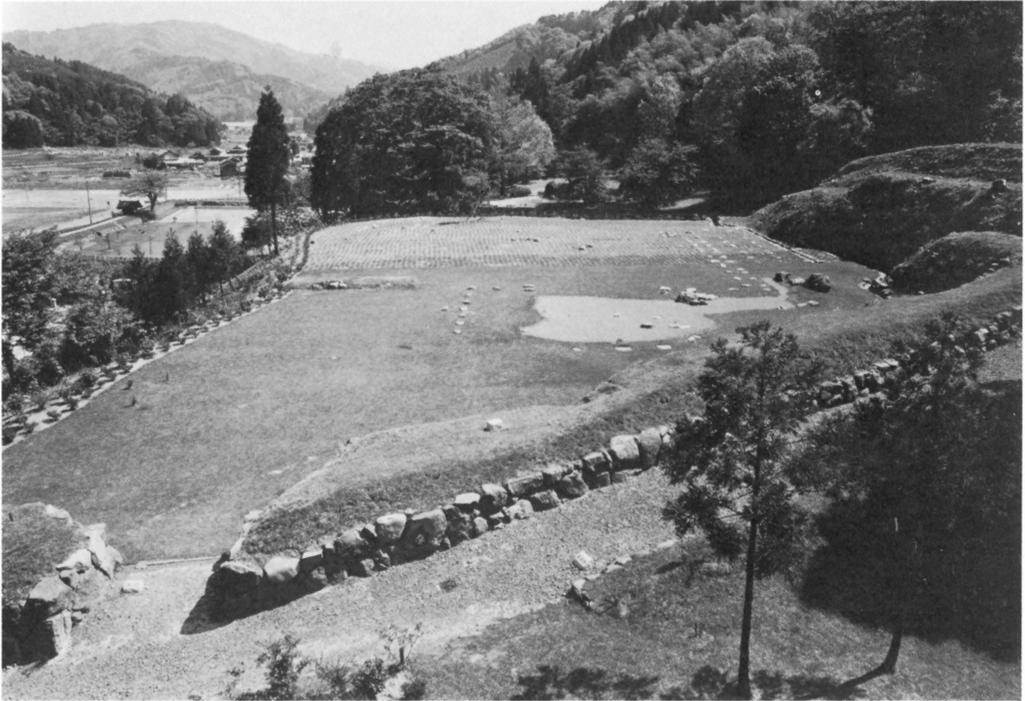
90

91

64庖丁 65鉞 66水滴 67鏢 68~91火繩銃関連遺物



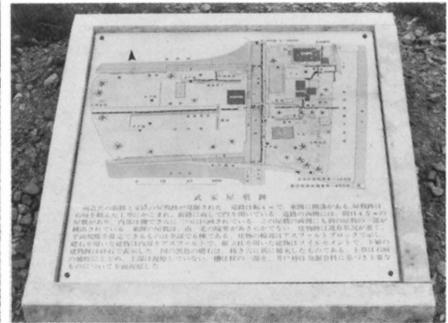
92~94 木製卒塔婆
95・96 石仏・供養板碑



中の御殿跡整備状況 南から



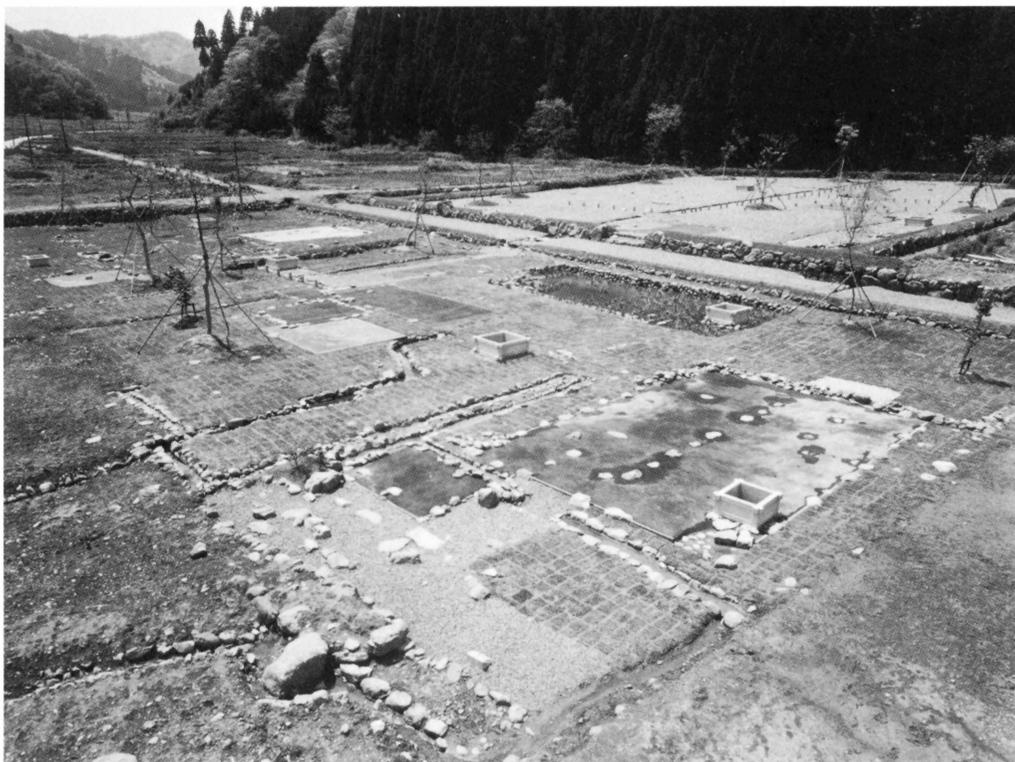
空濠整備状況 北から



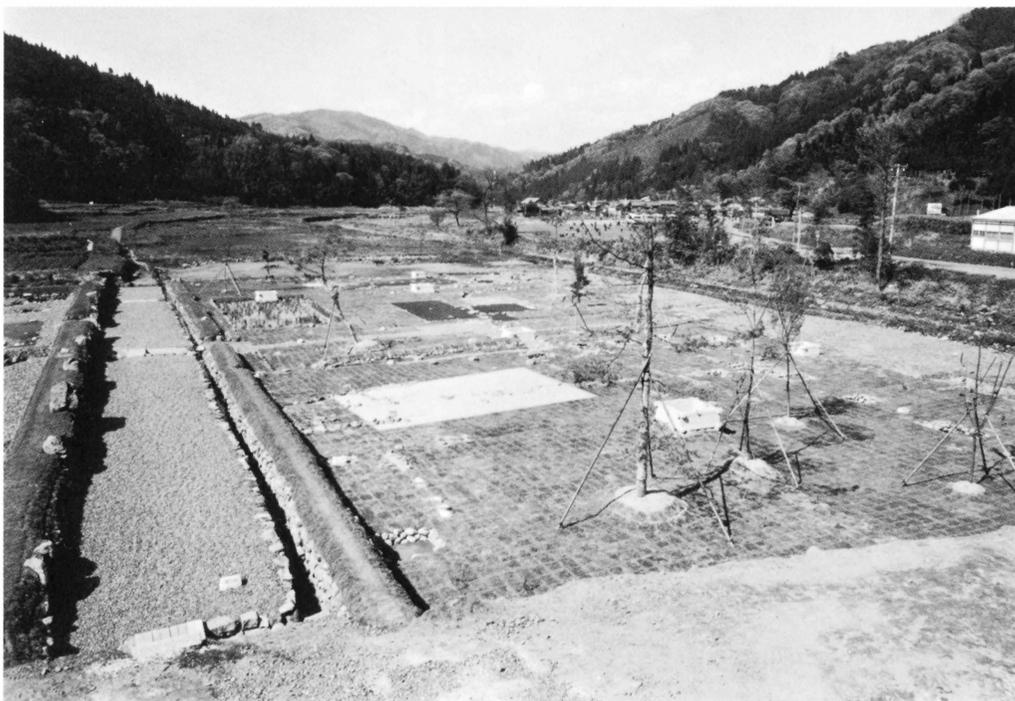
銅製説明板



遺構表示石柱



武家屋敷跡整備状況 東北から



武家屋敷跡整備状況 西南から



門・通路付近整備状況 西から



井戸・柵跡付近整備状況 南から



鹿俣最勝寺四方仏



Ni 145



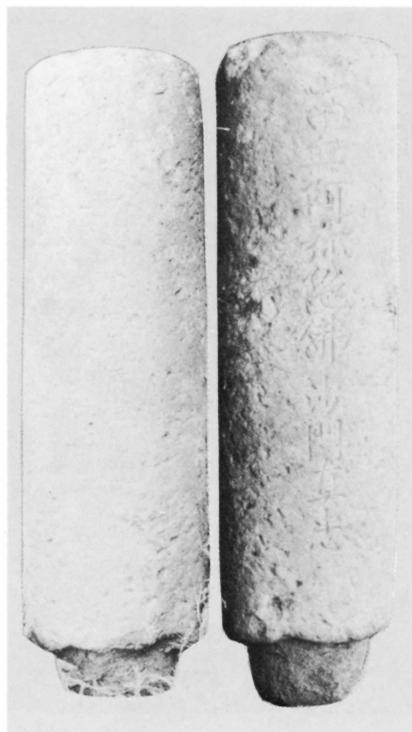
上東郷所在 十三仏(カ)



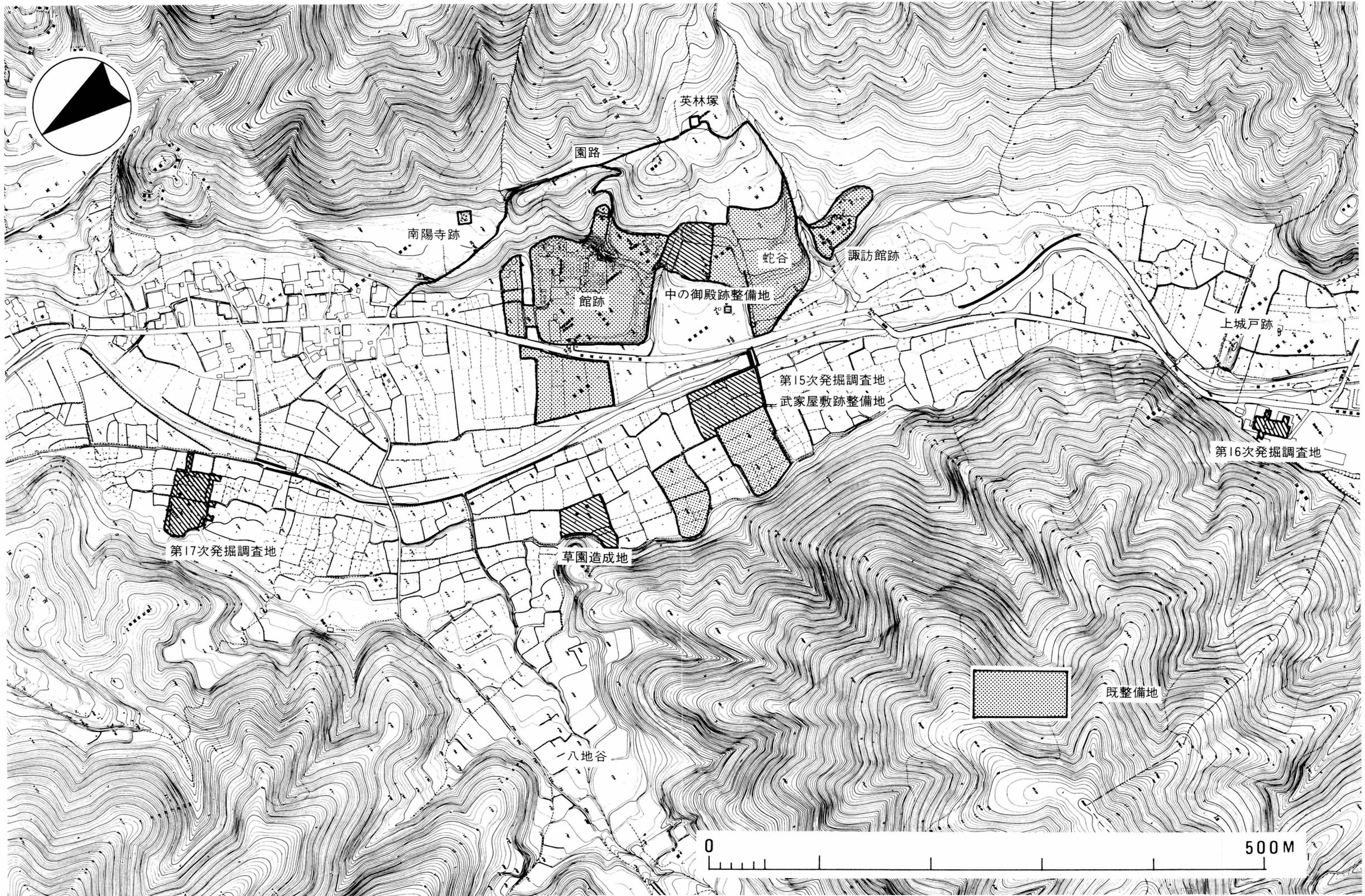
西山光照寺千手観音(KO 28)

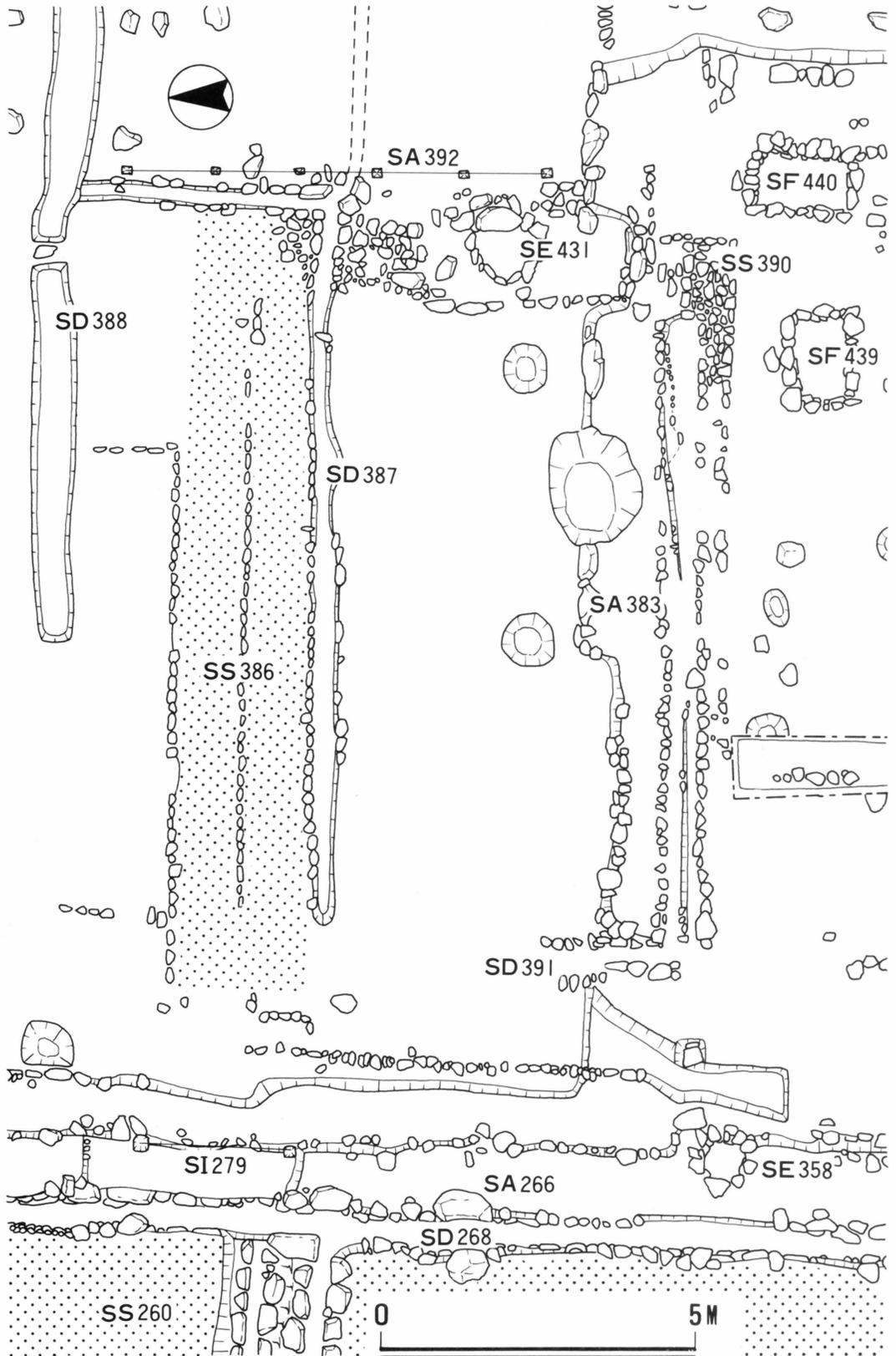


栃泉愛宕神社所在

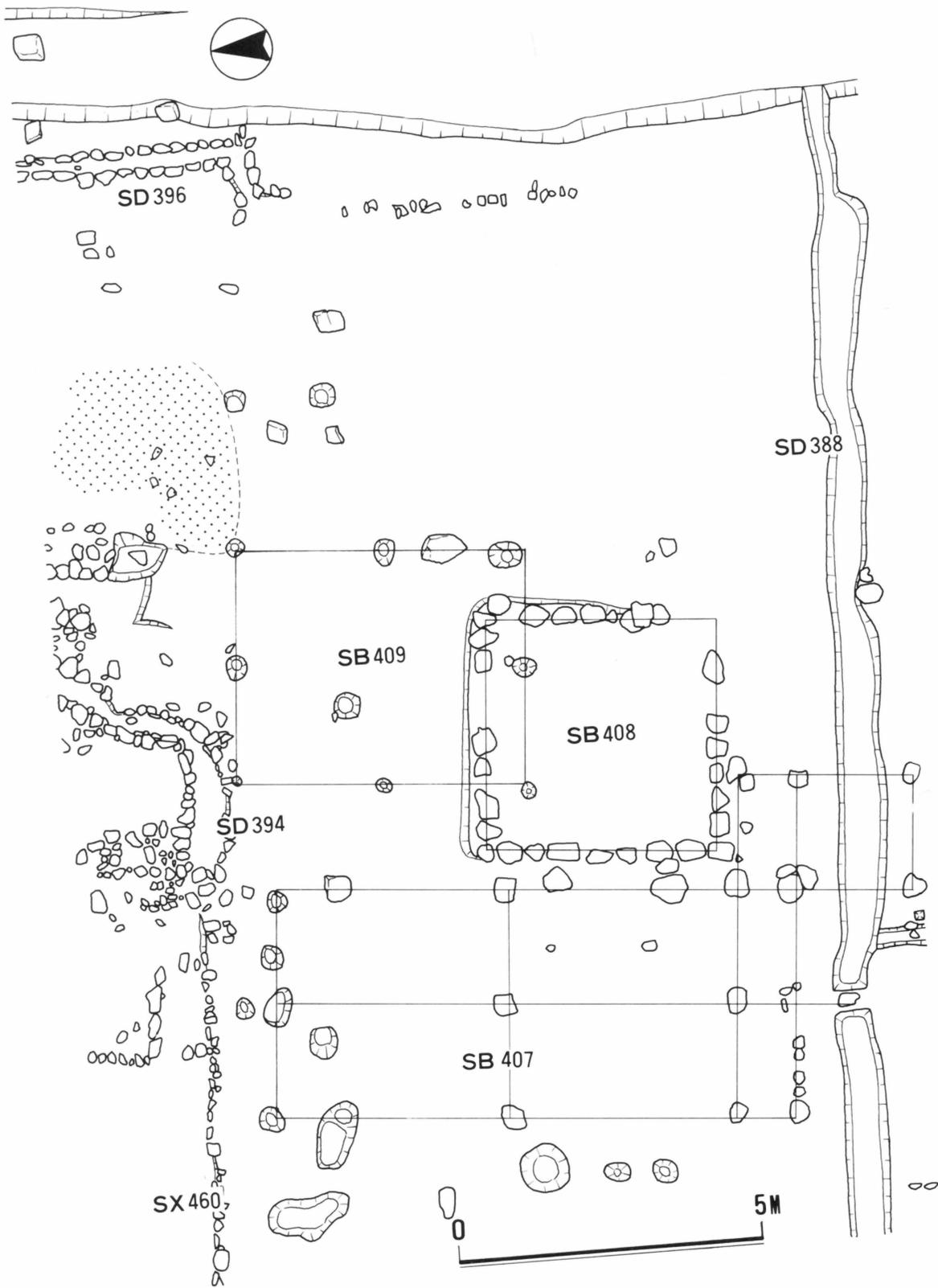


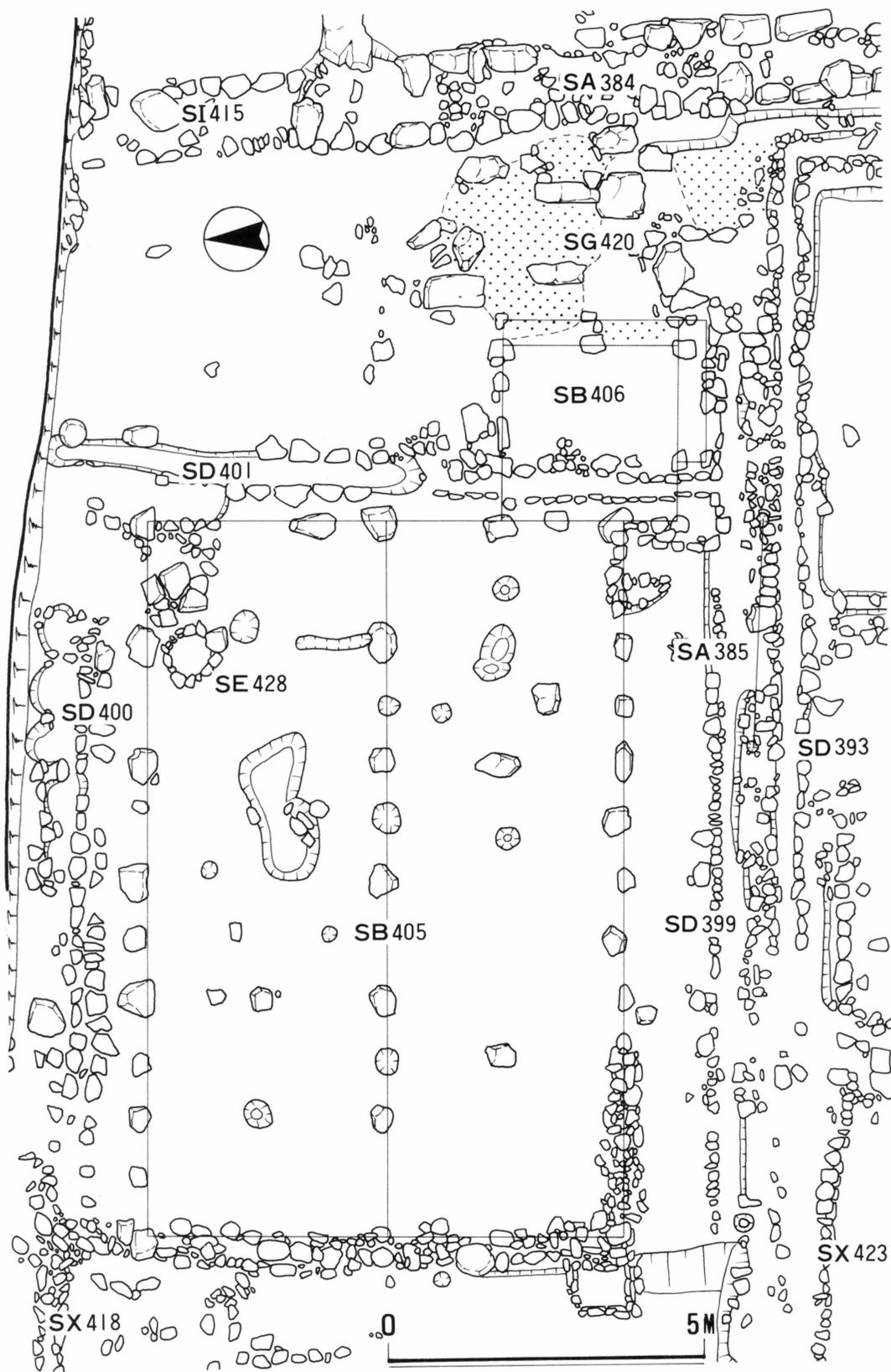
鹿俣最勝寺開山御廟前石燈籠

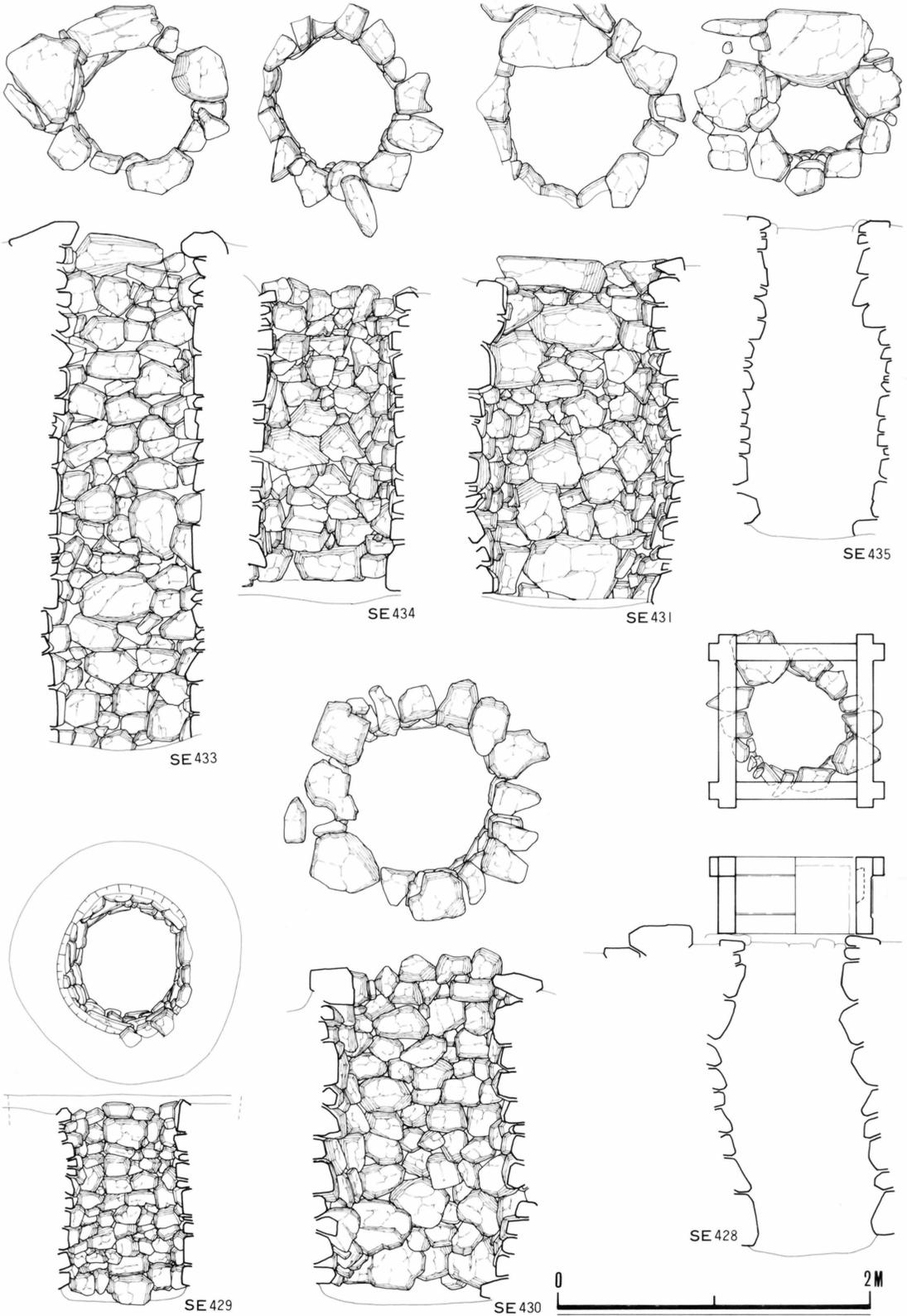


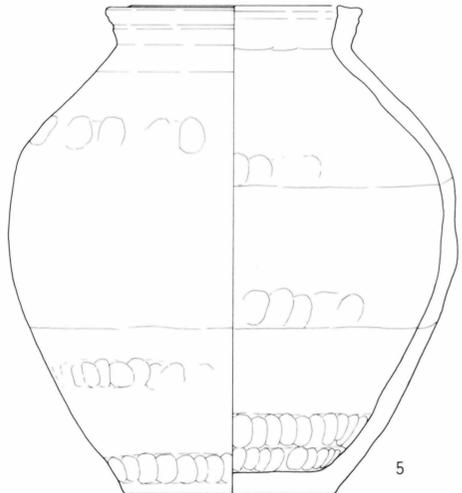
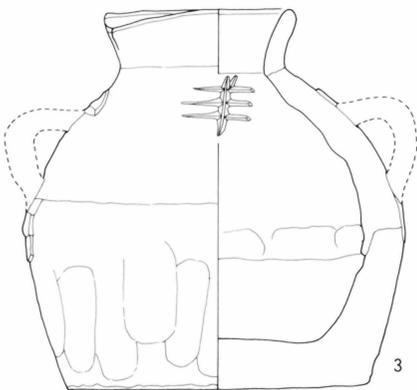
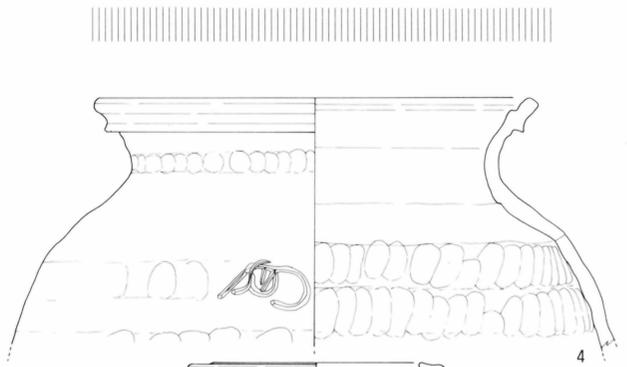
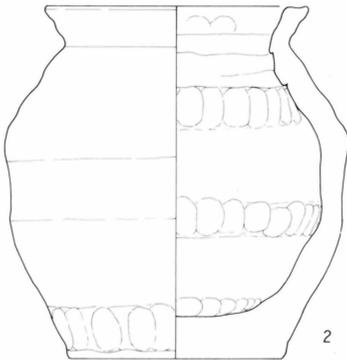
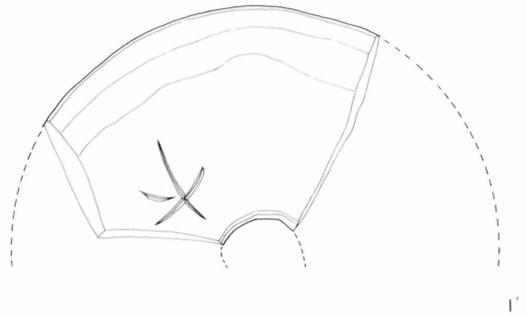
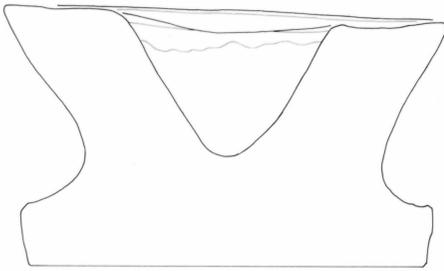
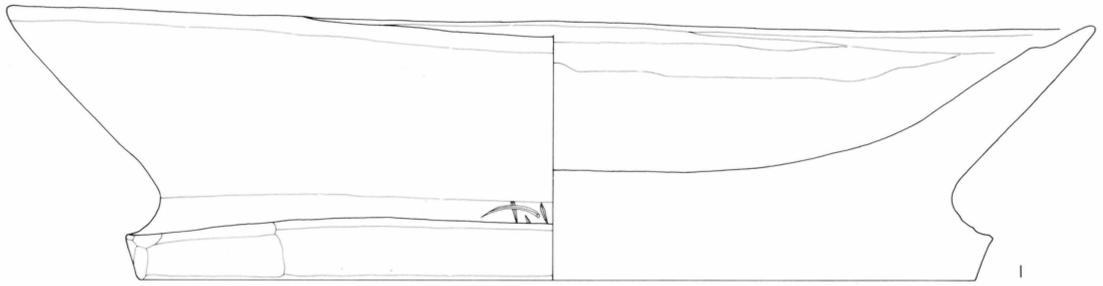


第4図

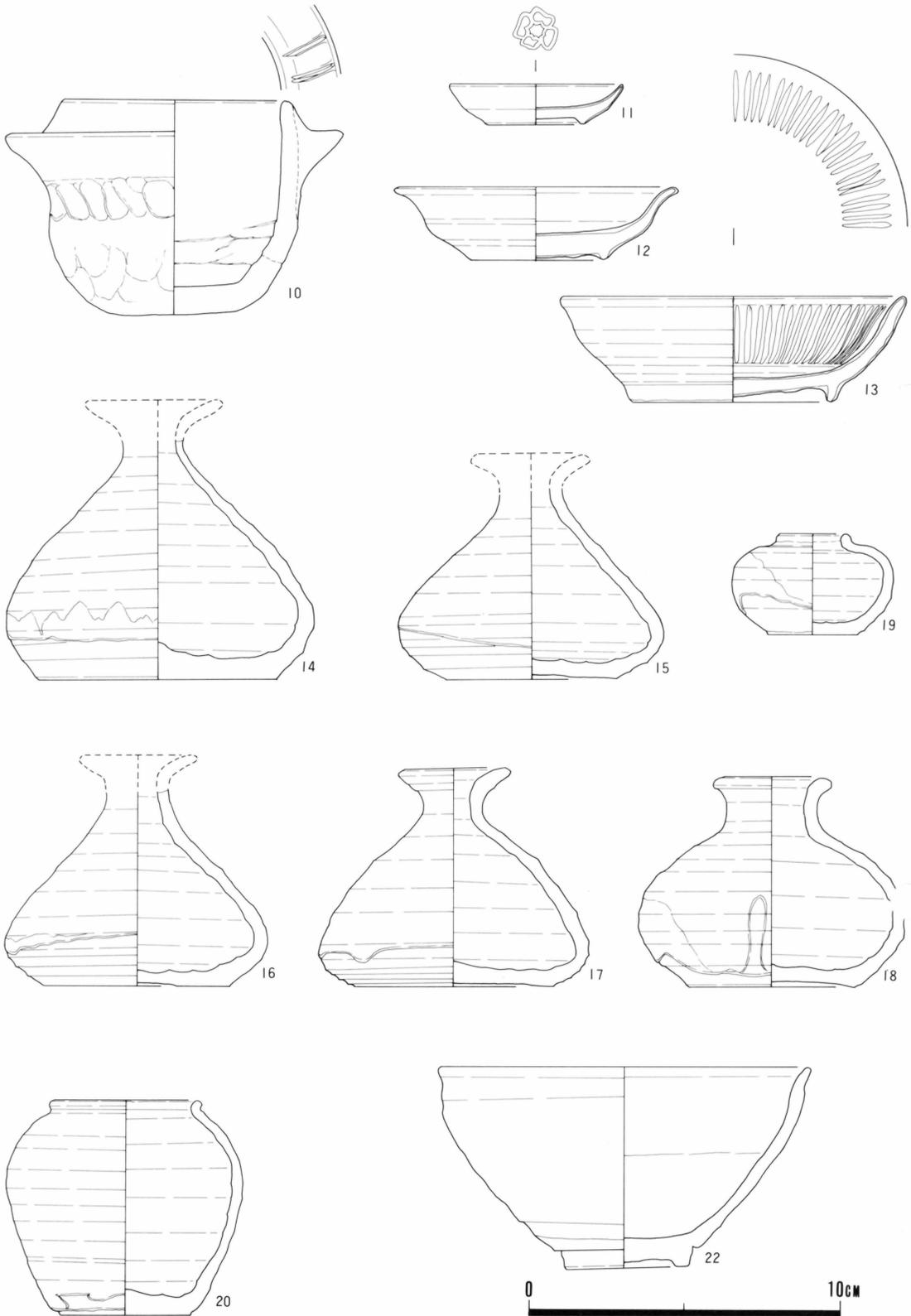




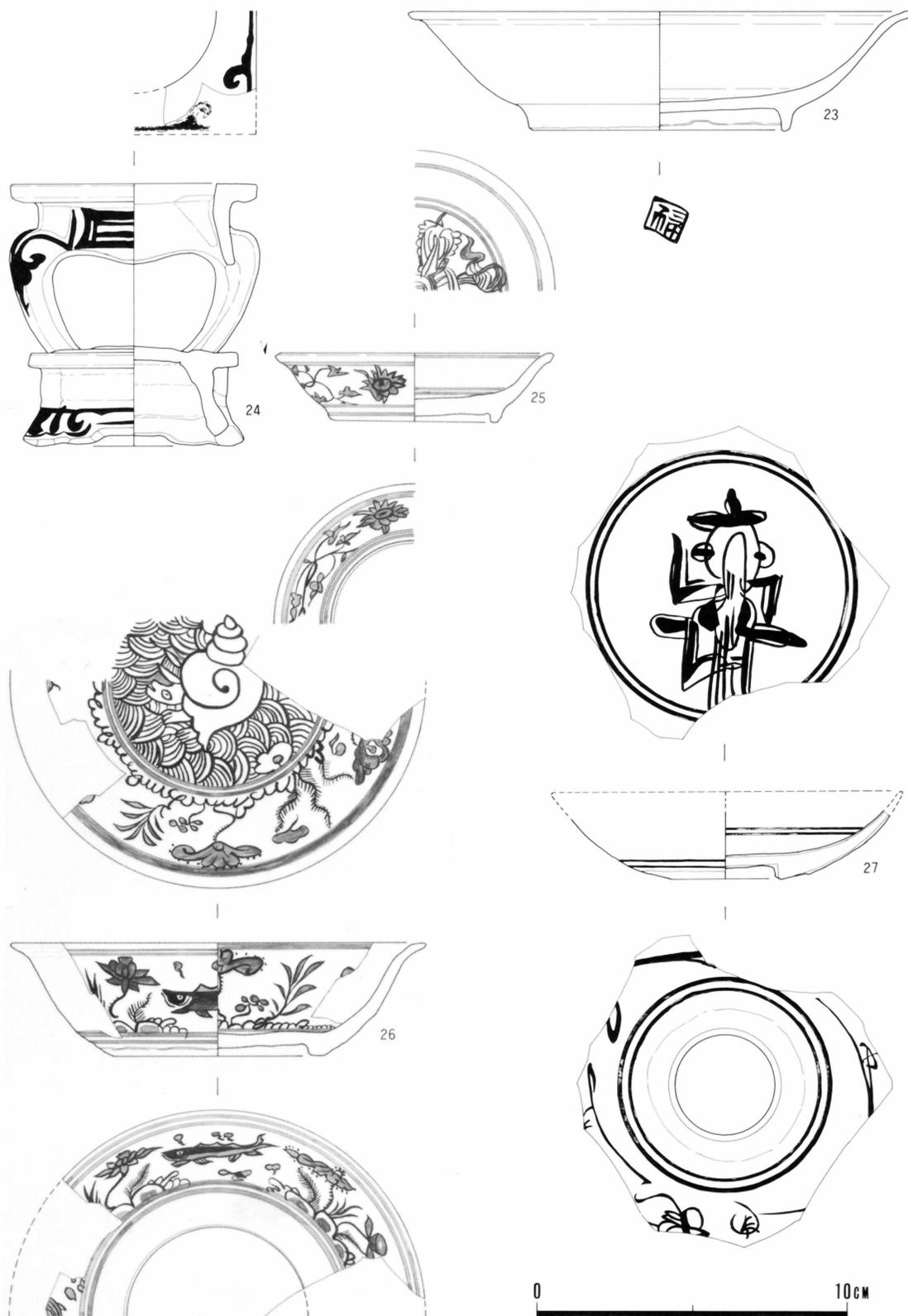




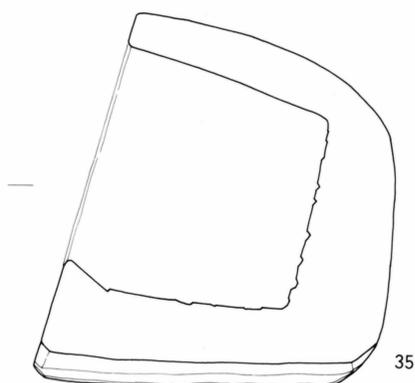
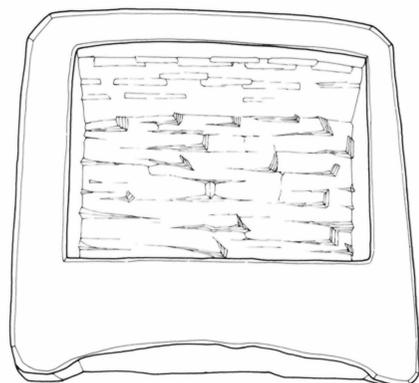
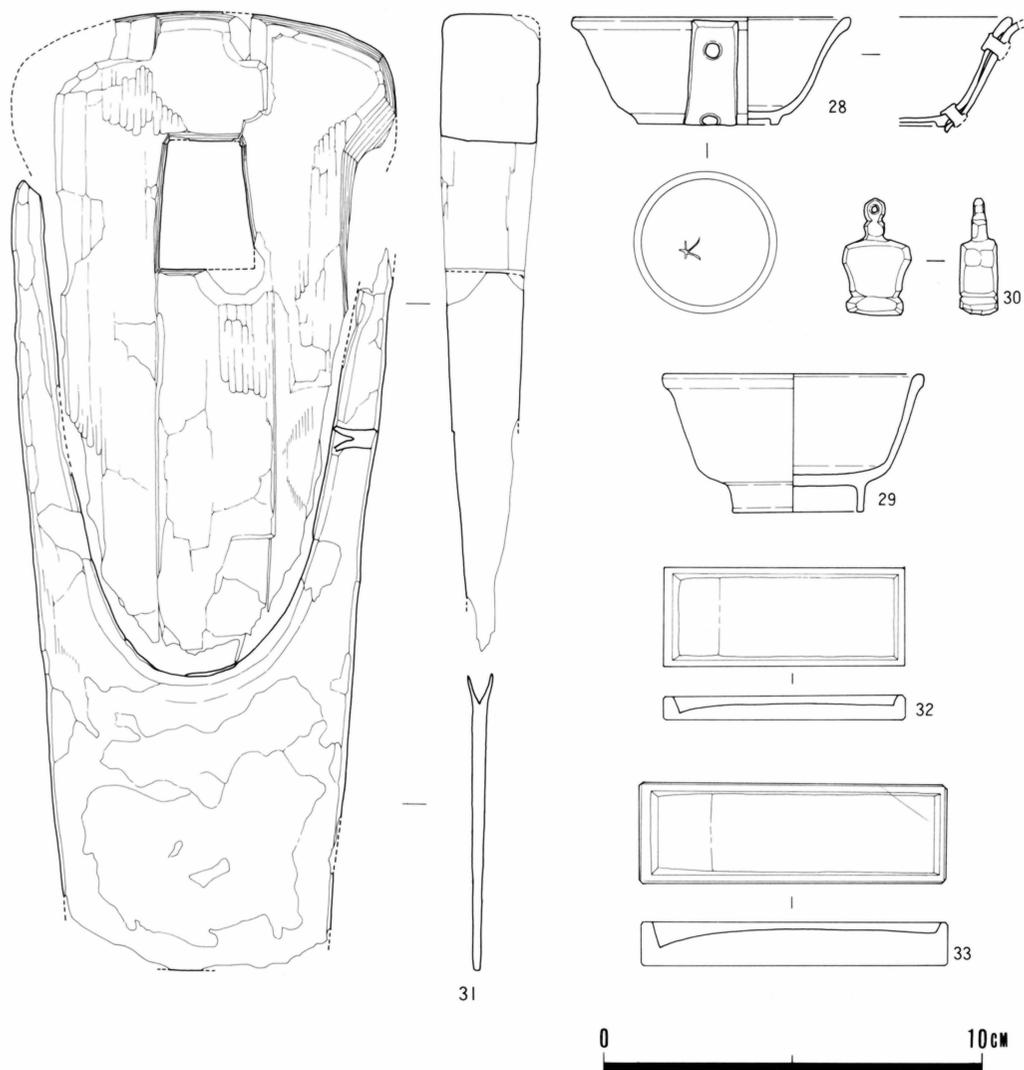
越前焼 1. 菜研 2. 小壺 3. お歯黒壺 4・5. 壺



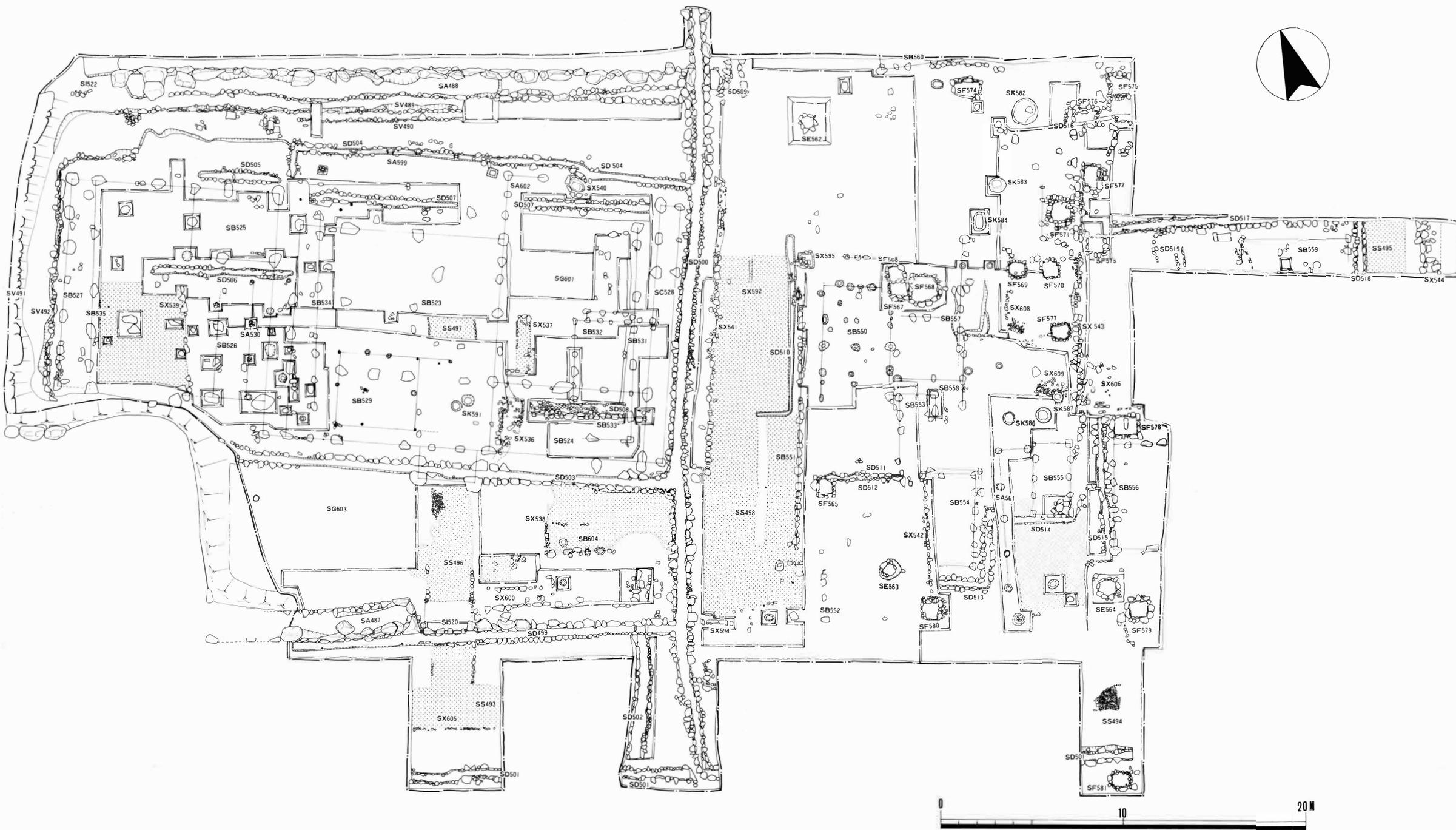
土師質土器 10. 羽釜 美濃・瀬戸焼 11~13. 皿 14~18. 小壺 19・20. 茶入札 22. 天目茶碗



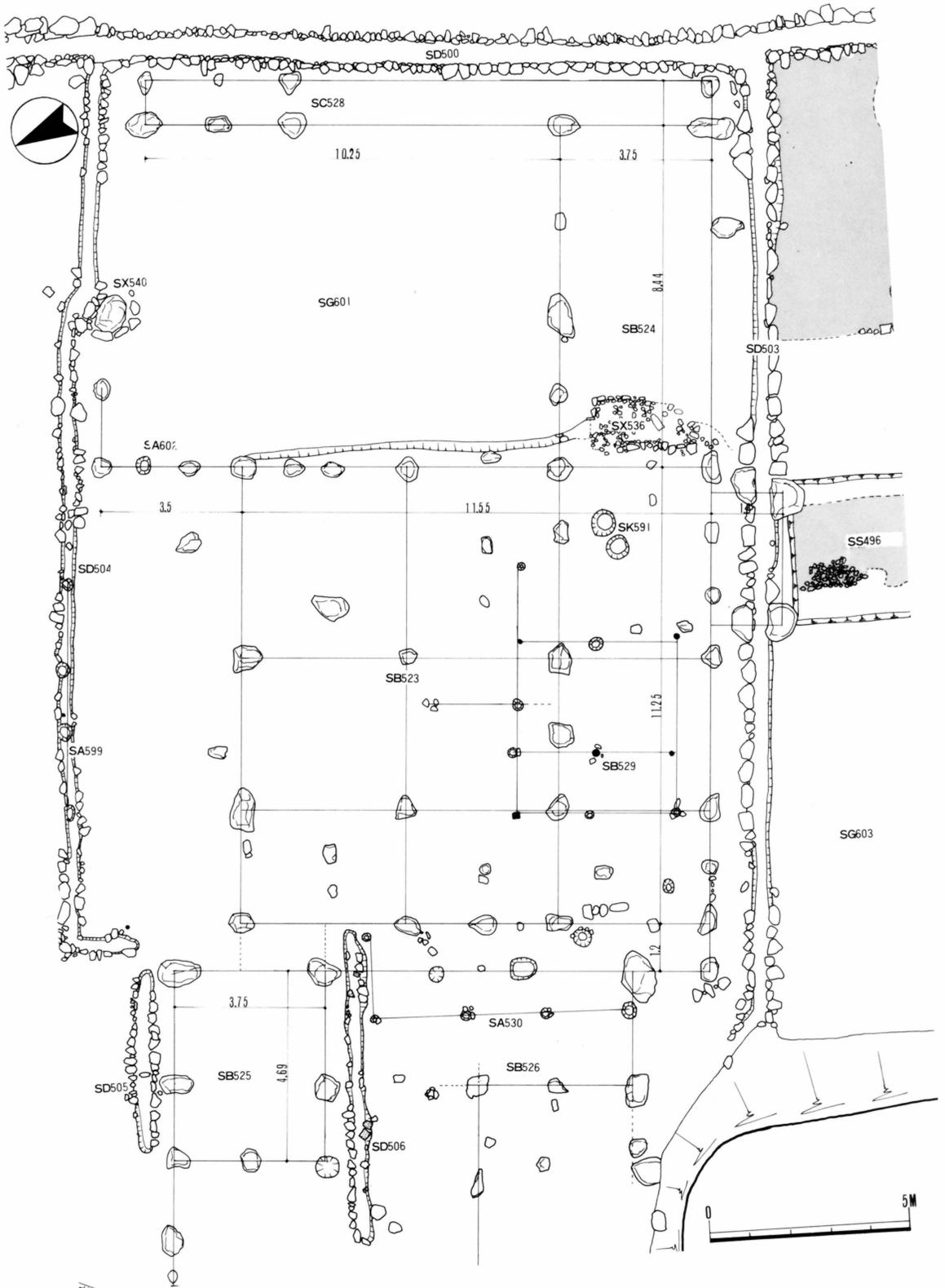
中国製白磁 23. 皿 中国製染付 24. 承台 25~27. 皿

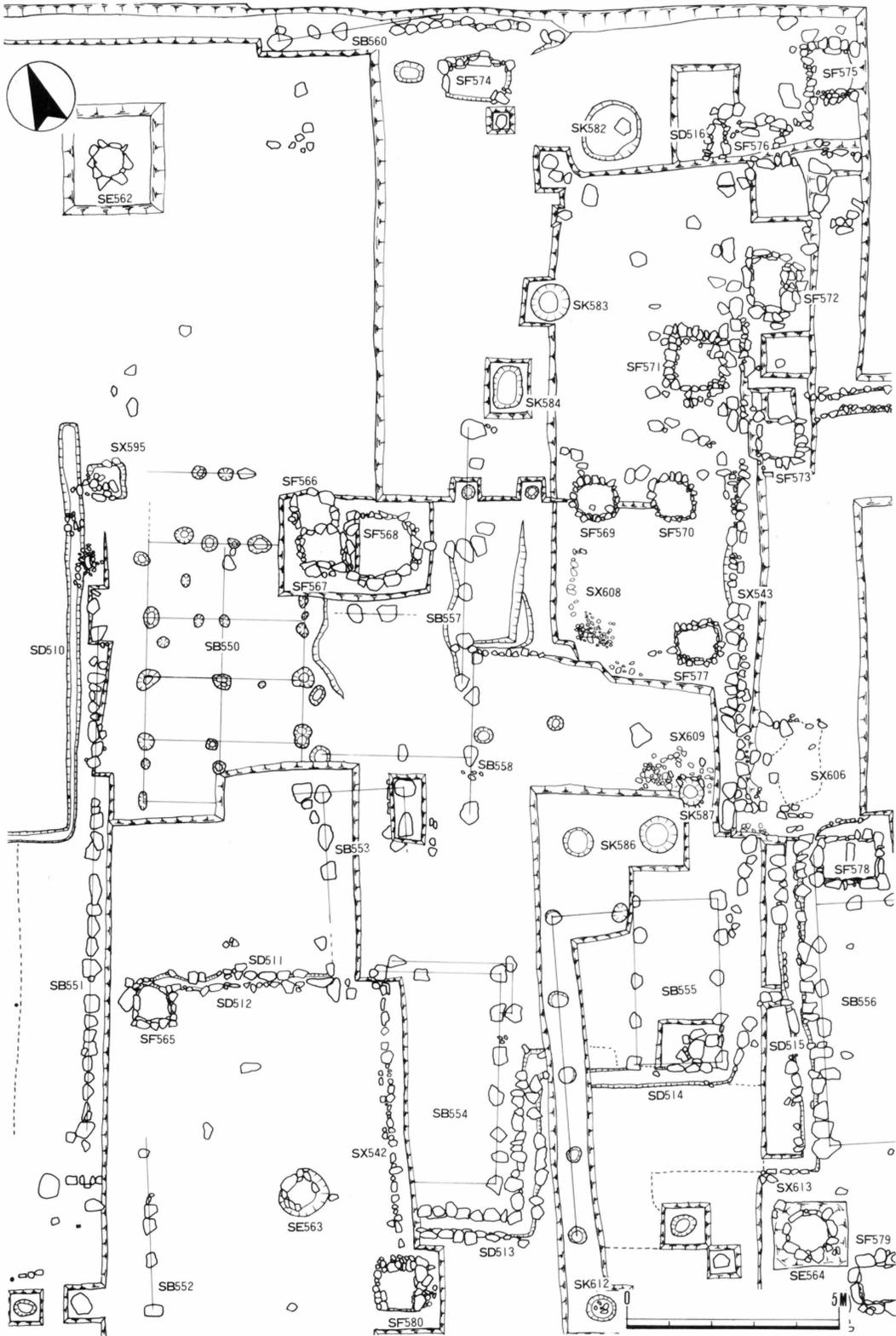


鉄製品 28・29. 銅環 30. 分銅 31. 鍬先 石製品 32・33. 硯 35. 火炉

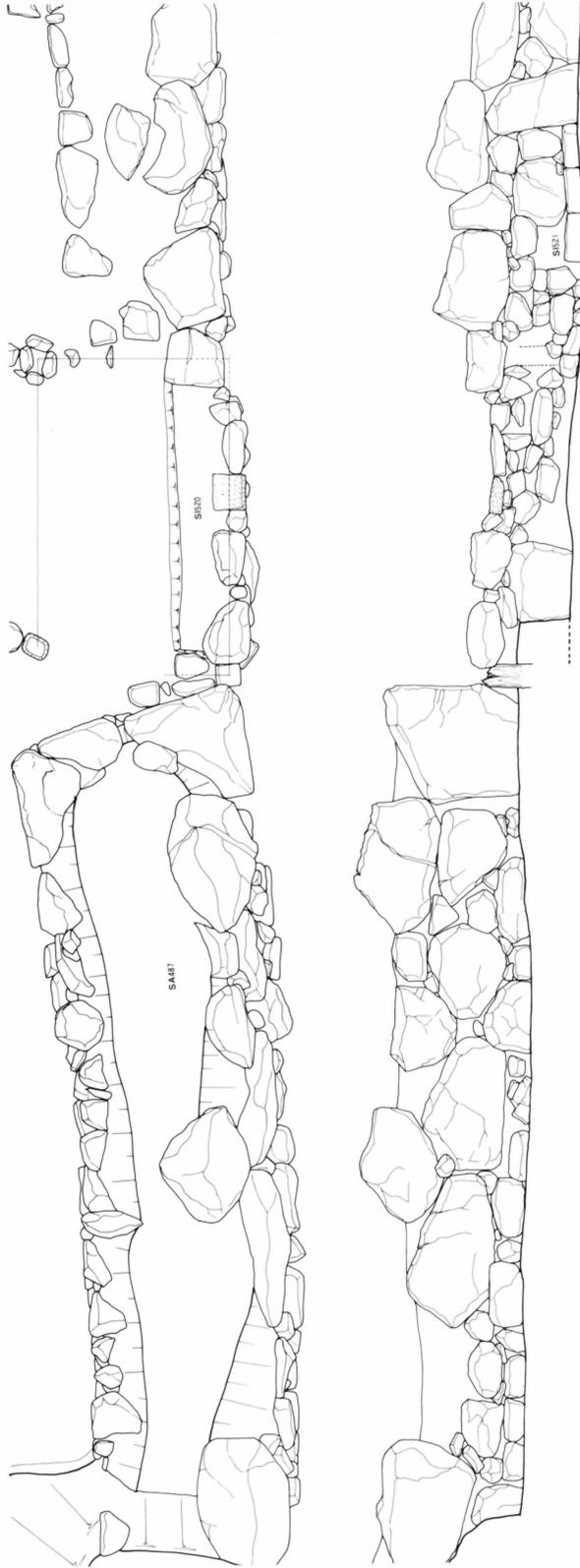


第12図



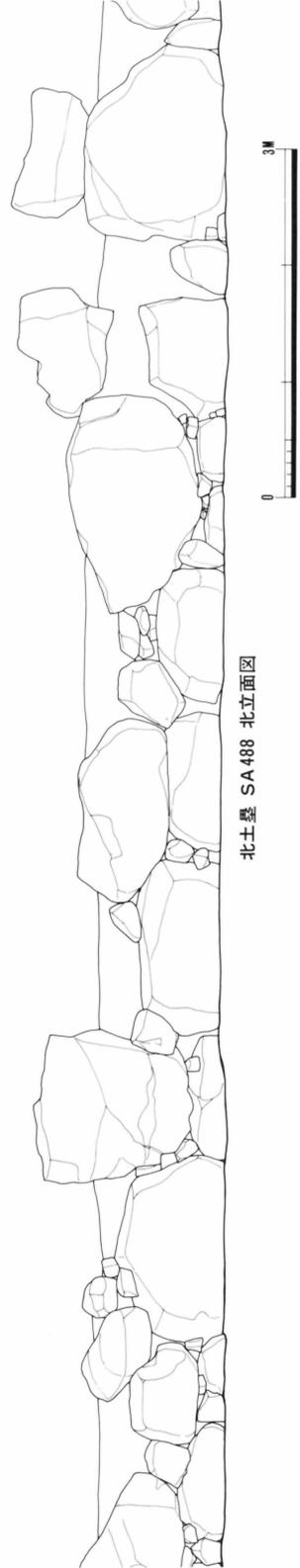


第14図

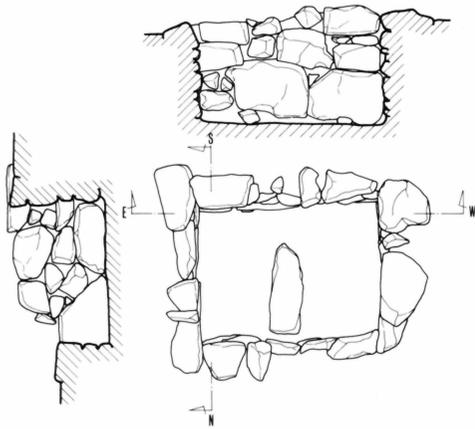


南土壘 SA487・門 SI 520-521 平面図・南立面図

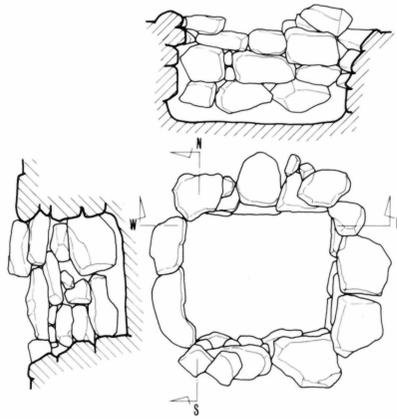
第17次調査・遺構(3)



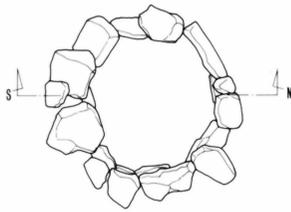
北土壘 SA488 北立面図



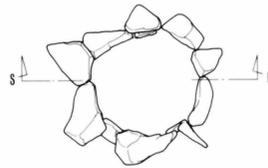
石積施設 SF 578 平面図・立面図



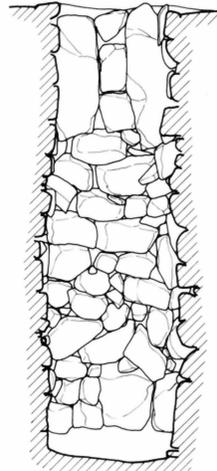
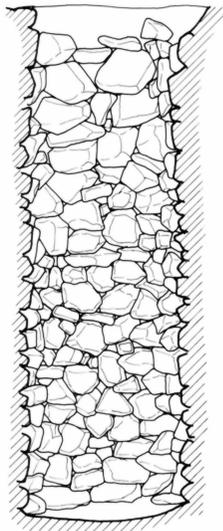
石積施設 SF 579 平面図・立面図

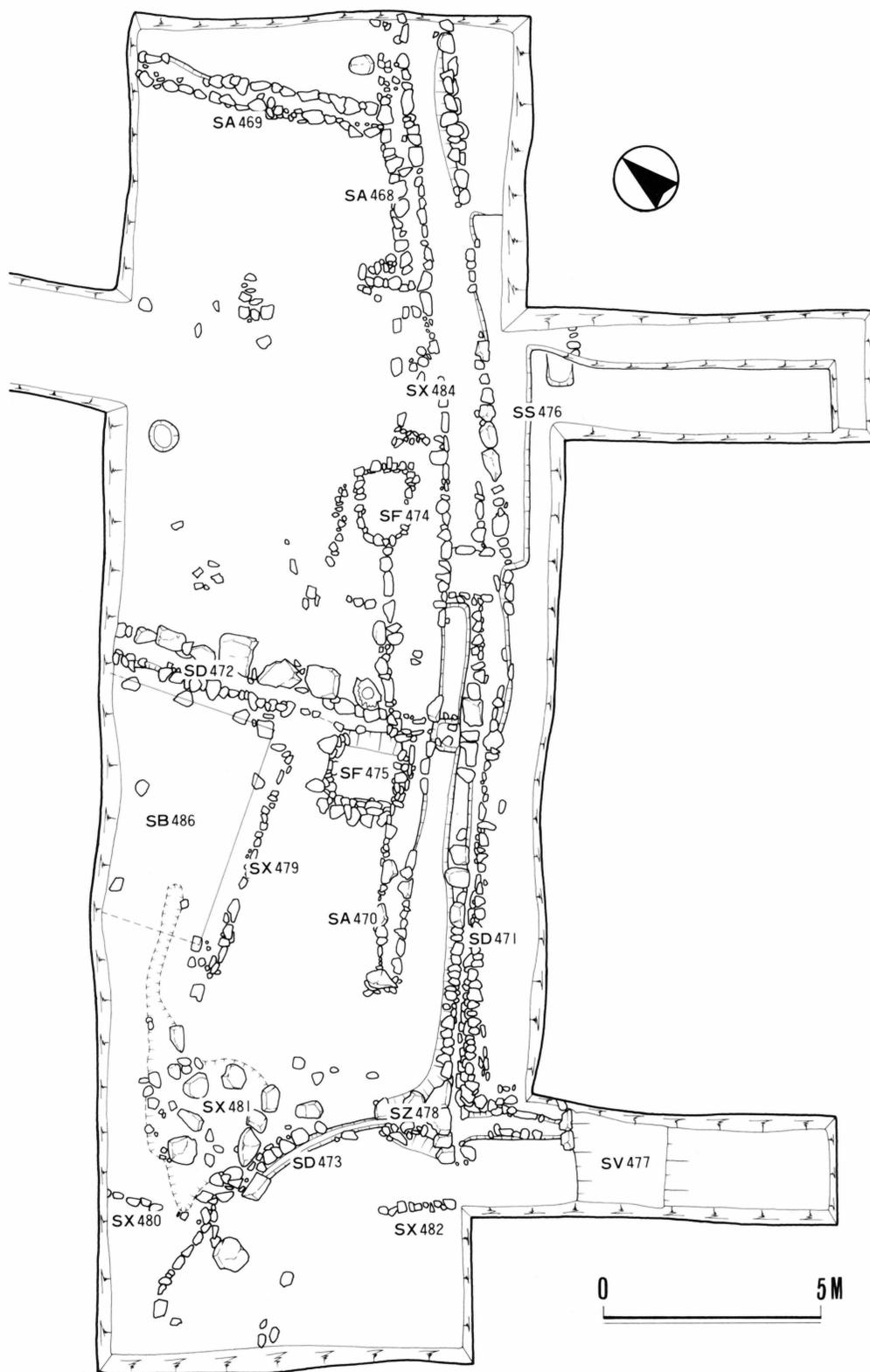


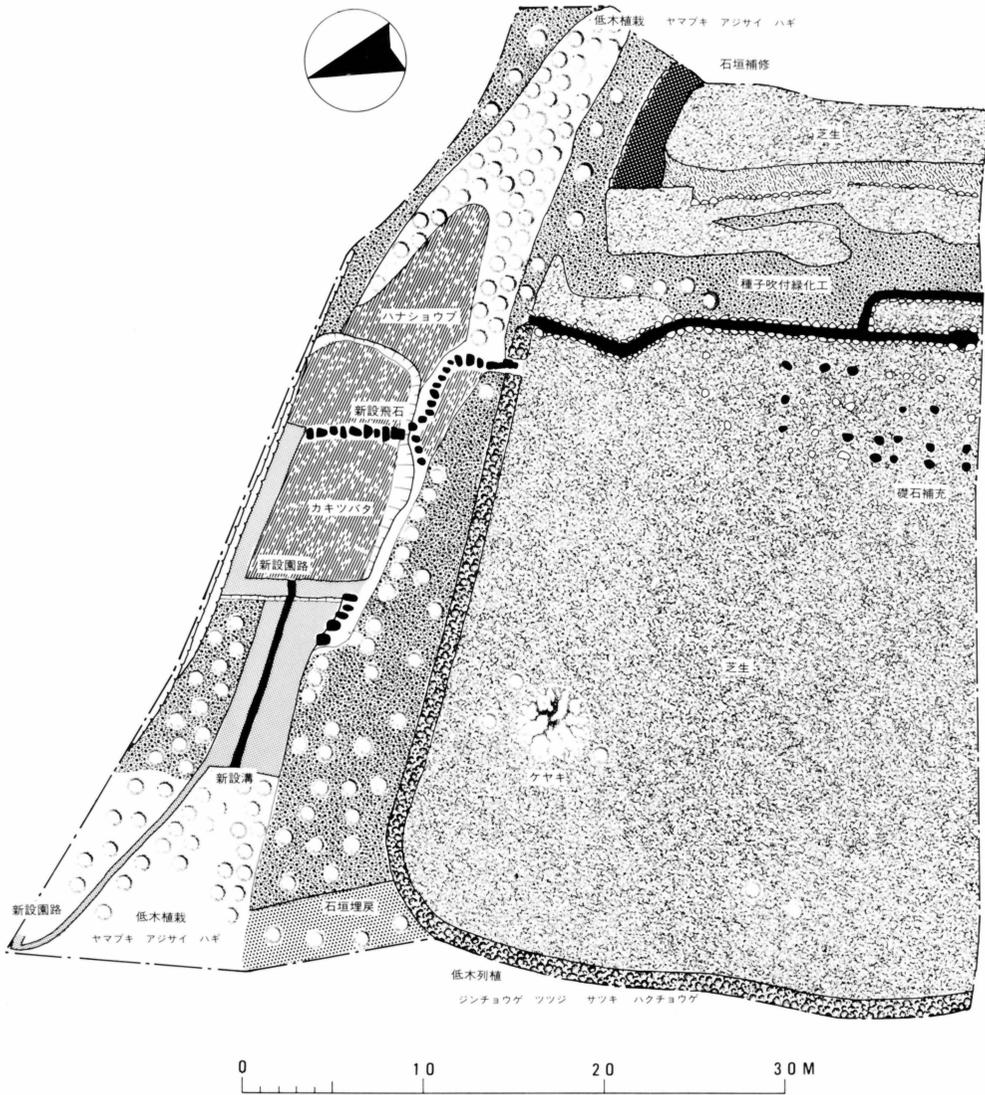
井戸 SE 564 平面図・立面図



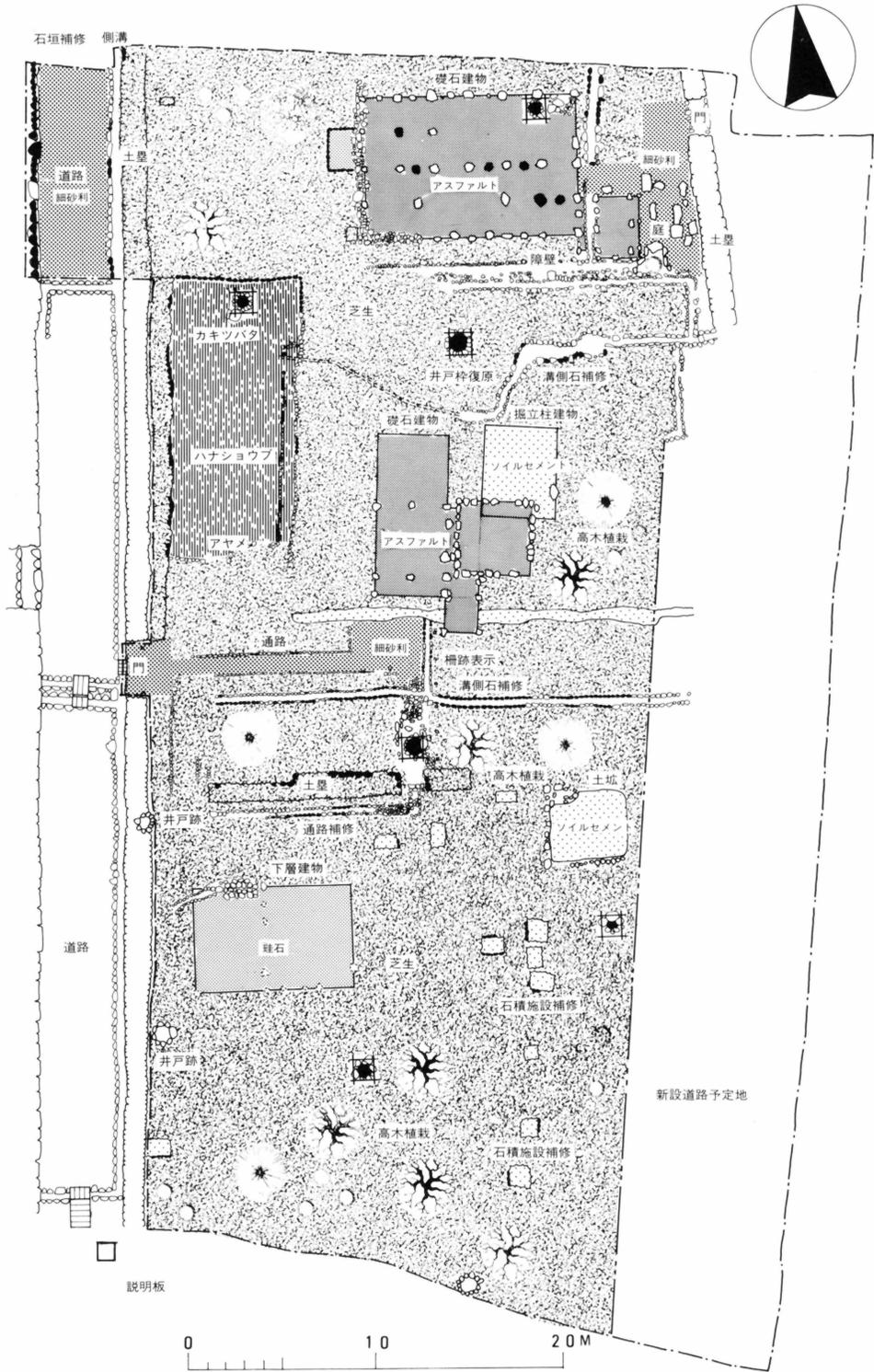
井戸 SE 562 平面図・立面図



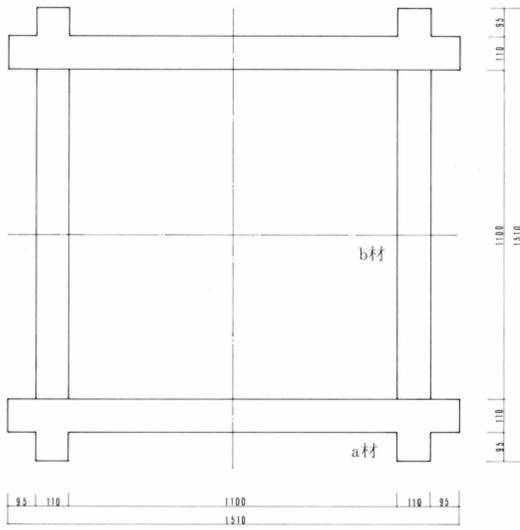




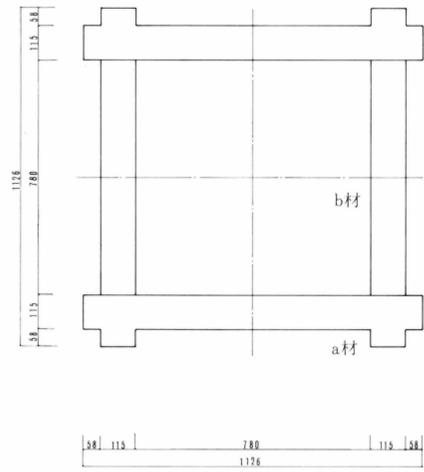
中の御殿跡整備図



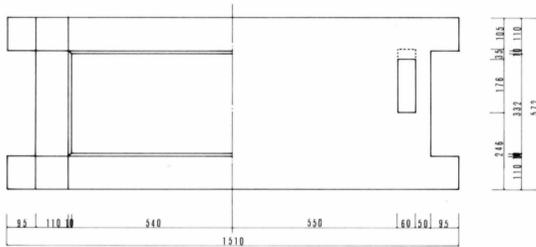
武家屋敷跡整備図



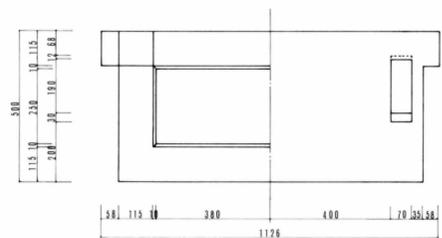
A型 平面



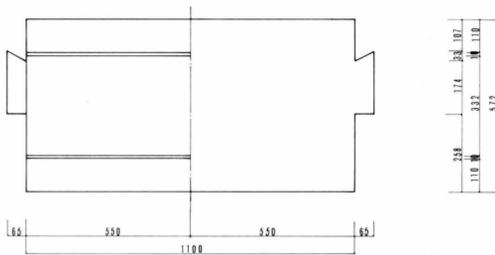
B型 平面



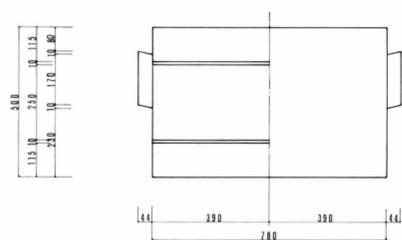
a材 立面



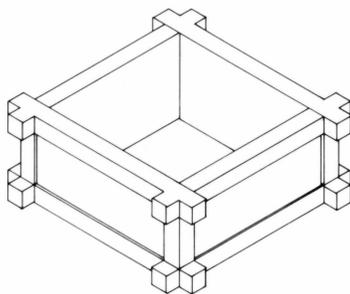
a材 立面



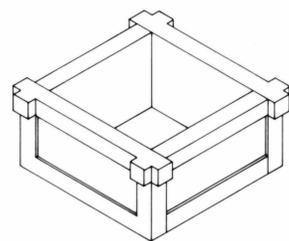
b材 立面



b材 立面



A型 見取図



B型 見取図

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 VII

— 昭和50年度発掘調査整備事業概報 —

昭和51年 3月31日

編集発行 福井県教育委員会
朝倉氏遺跡調査研究所◎
印刷 創文堂印刷株式会社

無断転載を禁ず